



名古屋大学国際教育交流本部

国際言語センター

年 報

第2号



目次

巻頭言	福田 真人	1
実践報告		
・名古屋大学・豊田市シンポジウム 日本語教育における「連携」を考える	衣川 隆生	5
・平成26年度公開講座「留学生に対する日本語パートナー講座」	衣川 隆生	7
活動報告		
・FD活動の報告	初山 洋介	11
・第70期（2014年4月期）日本語研修コース	鹿島 央	13
・第71期（2014年10月期）日本語研修コース	衣川 隆生	16
・第33期 上級日本語特別コース（2013年10月～2014年9月）	初山 洋介	18
・全学向日本語プログラム 2014年度	李 澤熊	21
・学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」	浮葉 正親	25
・短期留学生日本語プログラム 2014年度	石崎 俊子	28
・第15期 日韓理工系学部予備教育コース	村上 京子	30
・日本語教育メディア・システムの開発	石崎 俊子・佐藤 弘毅	32
・G30国際プログラム（学部）における日本語科目	初鹿野阿れ・徳弘 康代	35
資料		37

巻頭言

国際言語センター長

福 田 眞 人

国際言語センターが第二回目の年報を出す。

二回目ではまるで歴史が無いようだが、留学生センター、さらにその前身の言語文化部、総合言語センターの時代から考えると、相当の時間が経った。

時間が経ち、歴史が伸びても、すべきことは大差がないのかもしれない。

国際言語センターの役目は、第一に諸外国から来日して、名古屋大学で研究、教育、学修に携わる人々への、言語サービスである。言語サービスと言うと軽んじる人がいるかも知れないが、いわば基礎を置く作業を効率よくお手伝いするということで、日本におけるすべての最初である。

言語には、文法もあれば、漢字もあれば、語法もあり、また文体論もある。さらには、サービスとくると、教育法も CALL 授業用資料作成もある。言語学から応

用言語学、さらには細分化された最先端の言語教育がある。

この年報にその一端が顕著に現れていればよいのだが、細分化され過ぎて、言語を教える、伝える使命の本質がぼんやりとなるようでは困る。

近年日本では、いや世界でも、人文学が軽んじられようになったという。確かに華々しい IT やら、生物学の iPS 細胞などと比べると、どうしても見劣りがするのかも知れない。しかし、人文学はすべての基礎・基盤であり、言語はまたその最底辺に位置して、その上部の構造を支えるものである。

言葉なくしては、人はない。人文学なくして研究も教育もない。その自明の使命を帯びて、これからも粛々と言語の世界に生きることとしよう。

実践報告

名古屋大学・豊田市シンポジウム

日本語教育における「連携」を考える

—地域全体で取り組む日本語教室を核とした多文化共生社会づくり—

衣川 隆生

1. はじめに

名古屋大学は平成20年度より豊田市内に在住、あるいは在勤の外国人が円滑な日常生活を営むために最低限必要な日本語能力を習得することを支援する包括的な「とよた日本語学習支援システム(以下、システム)」の構築、普及に豊田市と共働り取り組んできた。平成25年度からは豊田市よりシステムの運営に加え、導入教育カリキュラム開発の追加委託を受けるとともに、文化庁より「生活者としての外国人」のための日本語教育事業・地域日本語教育実践プログラム」を受託し、市内在住・在勤の外国人が地域社会で生活していくために必要な基礎知識と日本語能力を身につけるための学習支援事業を展開してきた。本シンポジウムは、その事業報告を行うとともに、行政・産業界・日本語教育などの様々な観点から事業の成果、課題、今後の展望を議論し、多文化共生社会構築に資する日本語学習支援のあり方を問い直すことを目的に開催されたものである。

2. シンポジウム内容

【日 時】平成27年3月3日(火)

13:30~16:30(開場12:30)

【会 場】豊田市役所東庁舎5階 東51・52会議室

【共 催】名古屋大学・豊田市

【定 員】100名(先着順) 参加費無料

シンポジウムは名古屋大学渡辺芳人理事・副総長、豊田市幸村的美副市長の挨拶で幕を開け、初めに「名古屋大学と豊田市の取り組み」と題し、平成25、26年度の取り組みを中心に、どのような体制で事業に取り組んだか、事業の推進に伴いどんな連携を行いどのような日本語教室や教材作りを行ったか等の総括的な事業報告がとよた日本語学習支援システム、システム・

文化庁 平成26年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 地域日本語教育実践プログラム (B)

名古屋大学・豊田市 シンポジウム
日本語教育における「連携」を考える
—地域全体で取り組む日本語教室を核とした多文化共生社会づくり—

名古屋大学と豊田市は共働り、平成20年度よりとよた日本語学習支援システムを構築・運営してきました。さらに平成25年度からは、生活場面に即した日本語学習支援に取り組んできました。本シンポジウムでは、その事業報告を行うとともに、行政・産業界・日本語教育などの様々な観点から議論し、多文化共生社会に資する日本語学習支援のあり方を問い直します。

■日時 平成27年3月3日(火) 13:30~16:30(開場13:00)

■会場 豊田市役所東庁舎5階 東51・52会議室
(豊田市西町3丁目60番地)

■定員 100名

■参加費 無料

■申込 EmailまたはFAXにてシンポジウム参加の旨を明記し、
①氏名、②所属(個人の場合は市町村名)、
③連絡先(電話・FAXまたはメールアドレス)を
ご記入の上、以下宛先までお申込みください。

■宛先 Email: nihongo2015@gmail.com
FAX: (052) 789-4700

■締切 平成27年3月2日(月)

■お問い合わせ ■
名古屋大学農林研究室 TEL: (052) 789-4700 Email: otoiawase@toyota-j.com
豊田市企画政策部国際課 TEL: (0565) 34-6963 Email: kokusa@city.toyota.aichi.jp

日本語教育における「連携」を考える —地域全体で取り組む日本語教室を核とした多文化共生社会づくり—

■名古屋大学と豊田市の共働りの経緯
平成20年度より豊田市が名古屋大学に事業委託し、日本語教室を柱に日本語能力判定や人材育成、eラーニング等の構築・運営を行う「とよた日本語学習支援システム」を構築・運用してきた。また、平成25年には文化庁から名古屋大学が委託を受け、豊田市をフィールドとして、発展的な日本語学習支援事業を展開している。

■プログラム

時間	内容
13:30	【あいさつ】 名古屋大学 理事・副総長 渡辺芳人 豊田市長 太田裕彦
13:40	【事業報告】 北村彬人 (とよた日本語学習支援システム システム・コーディネーター)
14:10	名古屋大学と豊田市の取組
14:10	【事例報告】 報告者: 衣川隆生(名古屋大学国際教育交流本部国際言語センター 教授) 日本語教育における 連携の意義 野田洋子(豊田市役所子ども部子ども家庭課 課長) 加藤聖加(豊田市役所社会部防災対策課 主事) コメンテーター: 新矢麻紀子(大阪産業大学 教授) ナシメント・サユミ(豊田市外国人市民会議員)
15:00	休憩
15:15	【パネルセッション】 これからの「地域日本語教育」を考える コーディネーター: 衣川隆生 パネリスト: 豊田彬人(公益財団法人豊田国際交流協会 理事兼事務長) 井上洋(一般社団法人日本語国際体連協会 社会広報本部部長) 金田智子(伊豆大学 教授)
16:30	

■会場
豊田市役所東庁舎5階 東51・52会議室
(豊田市西町3丁目60番地)

・名古屋鉄道「豊田駅」東口から徒歩5分。
又は、愛知環状鉄道「新豊田駅」東口から徒歩5分。
・駐車場は混雑が予想されますので、
できるだけ公共交通機関でお越しください。

■お問い合わせ
名古屋大学農林研究室 TEL: (052) 789-4700 Email: otoiawase@toyota-j.com
豊田市企画政策部国際課 TEL: (0565) 34-6963 Email: kokusa@city.toyota.aichi.jp

コーディネーター北村祐人より行われた。

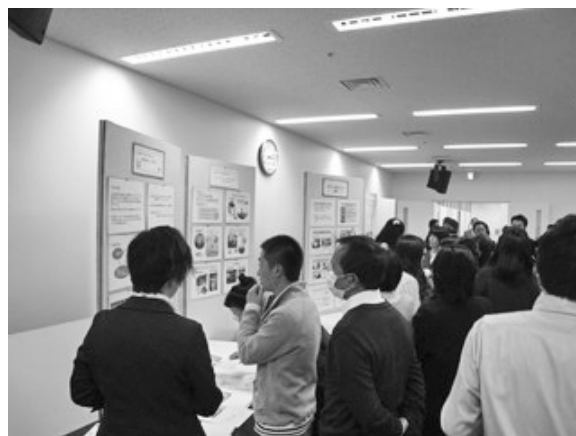
次に「日本語教育における連携の意義」と題し、名古屋大学が豊田市役所子ども部子ども家庭課、社会部防災対策課とどのように連携体制を構築したかの具体的な事例が衣川隆生より紹介され、それを受ける形で子ども家庭課野田洋子課長、防災対策課加藤聖加主事より、どのようなことを期待して連携に踏み切ったか、市役所の職員が多文化共生社会構築に関わることにどんな意義や課題や課題があるか、今後の展望は何か等の報告が行われた。この報告を受けて、大阪産業大学新矢麻紀子教授、豊田市外国人市民会議委員ナシメントサユミ氏から、それぞれの立場から見た本事業の成果、意義についてのコメントが述べられた。両氏からは「外国人の立場、視点から見た場合、行政サービスの制度はむずかしかつたり納得できなかったりすることも多い。この事業では、市役所の職員など、本当に住民に情報を伝えるべき人たちが、体験を通して外国人にとって分かりやすい講座や体験活動のあり方に気付く機会になったことは大きな成果である」等のコメントが出された。

後半は豊田市国際交流協会豊田彬子理事長、日本経済団体連合会井上洋社会広報本部長、学習院大学金田智子教授をパネリストとして迎え、衣川隆生をコーディネーターとして「これからの『地域日本語教育』を考える」と題したパネルディスカッションが行われた。今後、さらなる多文化共生社会を構築していくためには、どのような課題が存在しているか、本事業が課題解決にどう貢献できるかについてそれぞれの立場から意見が述べられた。「理念に基づき連携体制を構築し、それを現場に落とししていく方法論を示している本事業は他地域が同様の事業を行う際の参考となる」、 「日本語教室を核として市内の公的機関、企業、地域コミュニティの人が多文化共生社会構築に主体的に関わって連携・協力体制を作る本事業には、外国人の生活知識や日本語能力を向上させるだけでなく、地域の連携・協力体制作りにも貢献しうるものである」、 「受け入れ産業界に対する意識改革を促す教育が必要である」等の意見が出された。また、今後の普及を図るために、事業の成果を市役所職員の研修に活用してはどうか、市内で利用できる「言語学習パスポート」を作成してはどうか、などの提案も出された。

また、シンポジウムの開始前、休憩時、終了後には、会場後方で、実際に教室運営に関わった担当者が具体



「日本語教育における連携の意義」風景



パネル風景

的な事例を紹介するパネルを展示した。パネルの前には多数の来場者が集まり、担当者と熱心に情報を交換する姿が見られた。

シンポジウムには計130人が来場し、このうち100名からアンケートを回収することができた。参加者の内訳では比率の多い順に日本語学習支援ボランティアが30%、行政職員が15%、大学教員が11%であった。87%の人がシンポジウム全体の内容を「大変参考になった」「参考になった」と回答しており、また記述回答からも「今回のシンポジウムのような開催を近隣地域にも広げてほしい。」「継続を希望する」とあるように、本事業の今後の展開を期待する声が多く得られた。これらの声を糧に、日本語教室を核とした多文化共生社会づくりに地域全体で取り組んでいきたい。

※本シンポジウムは文化庁平成26年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 地域日本語教育実践プログラム (B) の委託事業の一環として開催されたものである。

平成26年度公開講座「留学生に対する日本語パートナー講座」

衣 川 隆 生

1. はじめに

国際教育交流本部国際言語センターでは、平成25年に引き続き日本語学習支援ボランティア組織「さくらの会」との共催で公開講座「留学生に対する日本語パートナー講座」を開講した。「さくらの会」は、旧留学生センター教員が講師を担当した名古屋市生涯学習センター主催2003年度日本語ボランティア入門講座修了生を中心として2004年4月から活動を開始した日本語学習支援ボランティア組織であり、「日本語で話そう」を合い言葉に現在国際言語センターを中心として週2回活動を行っている。

この講座は、現在大学や地域社会でどのような日本語学習支援が求められているかを概観するだけでなく、「さくらの会」の具体的な活動事例も紹介し、一人でも多くの方に留学生の日本語学習支援に関心をもってもらいたいと考え企画、開催したものである。

2. 講座の概要（別紙チラシ参照）

講座は11月26日から12月27日までの水曜日に4回実施された。時間などは別紙のチラシを参照されたい。

第1回「名古屋大学の留学生の状況と地域の国際化」

- 1) 「留学生30万人計画」「グローバル30」「スーパーグローバル大学創成支援」等、現在推進されている国際化施策について
- 2) 名古屋大学の国際化プラン、留学生数やその割合、出身地域などの現状について
- 3) 留学生に求められる日本語とは
「生活者として求められる日本語」「キャンパス日本語」「学術日本語」
- 4) 愛知県の外国人県民の現状・「あいち多文化共生推進プラン2013-2017」・「愛知県 多文化共生社会に向けた地域における日本語教育推進のあり方」について
- 5) 豊田市の外国人市民の現状、多文化共生施策、日

本語学習支援について

第2回「日本語学習の支援ってどんなこと？」

- 1) 日本語教育と日本語学習について
- 2) 狭義の日本語教育と広義の日本語教育について
- 3) 狭義の日本語教育の限界について
- 4) 学習のプロセスについて

第3回「対話と協働を中心とした学習支援の方法」

- 1) 対話と協働とは？
- 2) 新たな能力観、習得観について
- 3) 対話型の活動体験

第4回「具体的な活動を知ろう」

さくらの会の会員による活動紹介と対話

3. 受講者の状況とアンケート結果

コミュニティセンター等におけるチラシ配布、新聞広告を利用して受講者の募集を行ったところ20名の定員を越える40名以上の申し込みがあったため、抽選を実施し21名の方に受講していただくこととした。ほぼ半数の方が何らかの形で外国人に対するボランティア活動をしているが、ボランティア自体が初めてという参加者も3人に1人の割合であった。21名中13名が4回全てに出席し、5名が3回出席であった。また、終了時には18名からアンケートを回収することができた。


「受講の目的、期待」については「現在行っているボランティア活動を見直すきっかけにしたい」「日本語や文化について学び直したい」等の知識のブラッシュアップを求める方、「留学生の日本語学習や生活の力になりたい」という方が大半を占めた。「講座の内容が目的、期待に合ったものであったか」という項目に対しては「短くてまだ具体的にイメージできていない」「もう少し活動内容に踏み込んでほしい」「具体的な活動を見たい」など4回という回数の少なさから物足り

なさを感じた受講者もいた。その一方、受講者同士で言語的に制限された状況でコミュニケーションを行う活動を通じて「言葉の通じない外国人の側にいてあげることの大切さ」や「実践の場での日本語の大切さ」が理解できた、という回答も多かった。

4. 今後に向けて

上記、アンケート結果より「日本語パートナー」として本講座で最も伝えたかった「留学生に伴走しながら実践体験を積みあげていく」という考え方は、多くの受講者に理解されたのではないかと考えられる。しかしながら、もう一步踏み込んで、具体的にどのような活動をするのかまでは4回の講座では伝えられなかったとも考えられる。今後は、アンケートにもあった「具体的活動内容」も視野にいれた講座のあり方を検討していきたい。

—平成26年度公開講座—
さくらの会・名古屋大学国際教育交流本部国際言語センター共催

 **留学生に対する
日本語パートナー講座**


さくらの会は2004年より名古屋大学の留学生とその家族の日本語学習を支援しています。日本語パートナーとして、「教える」という言葉にとらわれず、テキストは使わないけれど学習者の知っている「ことば」から「対話」へと広げていく、『日本語で話そう』を合言葉にボランティア活動をしています。

ボランティアとして何かをしたいと思っている方、
日本語パートナーについて学んでみませんか。

***講座内容と日程**

	日 程	内 容
第1回	11月26日(水)	名古屋大学の留学生の状況と地域の国際化
第2回	12月 3日(水)	日本語学習の支援ってどんなこと?
第3回	12月10日(水)	対話と協働を中心とした学習支援の方法
第4回	12月17日(水)	具体的な活動を知ろう

時間 14時45分 ~ 16時15分
場所 国際言語文化棟 203教室
(地下鉄名城線 「名古屋大学駅」1番出入口)
講師 名古屋大学国際教育交流本部国際言語センター
教授 衣川 隆生



*昨年と同じ内容ですので、継続の方はご遠慮下さい。

***定 員**
20名 (応募多数の場合は、抽選の上決定します。)

***受 講 料**
無 料

***申込み方法**
下記の参加申込書にご記入の上、eメールまたはFAXにてお申し込み下さい。
eメールの場合は、参加申込書記入の内容をお知らせ下さい。

***締 切**
平成26年10月31日(金)
講座開始日の一週間前までに受講決定通知をeメール・FAXにてお知らせいただきます。
通知が届かないという場合は、お手数ですが下記までご連絡下さい。

***申込み・問合せ先(さくらの会)**
さくらの会代表 勝 雄三
eメール *****
F A X *****

*お問合せには名古屋大学では対応しておりません。さくらの会までお願いします。
***** きりとり *****

参 加 申 込 書

名 前 (ふりがな)
住 所 (郵便番号)
TEL
FAX
eメール
*個人情報につきましては、本講座の運営にあたって利用するものであり、それ以外に使用することはありません。

活動報告

FD 活動の報告

第70期 (2014年4月期) 日本語研修コース

第71期 (2014年10月期) 日本語研修コース

第33期 上級日本語特別コース (2013年10月～2014年9月)

全学向日本語プログラム 2014年度

学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」

短期留学生日本語プログラム 2014年度

第15期 日韓理工系学部予備教育コース

日本語教育メディア・システムの開発

G30国際プログラム (学部) における日本語科目

FD 活動の報告

糊 山 洋 介

日本語日本文化教育部門では、平成14年にFD班を設け、以後、現在に至るまで、日本語・入門講義の授業を担当する教員全員でFD活動に取り組んできた。さらに、平成16年には、留学生センターの委員会としてFD委員会を設置し、教員個々の教授能力の向上、授業の改善を目指している。

さて、今年度は、平成22年度に策定した下記の「平成23年度から27年度までのFD活動計画」に従い、FD活動を実施した。なお、平成25年度に改組があり、「国際言語センター」となったが、FD活動についてはこれに伴う変更はなく、計画通り行った。

平成23年度から27年度まで（5年間）のFD活動計画

毎年度、教育（特に授業）を改善するための「研修会」を開催する。

研修会の回数：各年度、2～4回程度。

研修会の形式など

講演者・発題者があるテーマについて話し、その後、質疑応答・ディスカッション。

火曜日の全体会の時間帯を当てる（1時間程度）。

講演者・発題者は、話の内容を、A4、1～2枚程度にまとめ、記録として残す。

今年度実施した「FD研修会」の内容は下記の通りである。この研修会（2回）には、国際言語センターの専任教員および非常勤講師の大半が出席し、講演の後、活発な質疑応答・議論が行われた。

1) 第1回FD研修会

日時：2014年12月16日（火）午後3時～4時

場所：国際言語センター301号室

講師：李澤熊名古屋大学准教授

題目：韓国人日本語学習者のための日韓対照言語研究
内容：

日本語と韓国語は文構造が非常によく似ているため、日本語は韓国人にとって学びやすい言語であると

言われている。確かに、語順をはじめとする文法がよく似ていることは事実であるが、助詞の使い分けなど、異なる点も多いため、注意しなければならない。

以上の状況を踏まえ、今回のFDでは、これまで行ってきた研究成果を紹介した。例えば、日本語と韓国語には中国語起源の漢語系語彙が数多く含まれているが、両言語の語彙の間には様々な点で違いも見られる。（主に名詞について）少なくとも以下のようなパターンがあることが分かる。

- (1) 漢語系語彙の中で、日本語と韓国語の間でまったく異なる意味で用いられる例。
- (2) それぞれ表す意味は同じであるが、語や音節の配列が反対になっている例。
- (3) 日本語とそのままの形では対応しないが、使われている漢字からその意味が推測できる例。
- (4) 類義関係にある複数の語が一語に対応する例。

今回のFDでは、「類義関係にある複数の日本語の名詞が韓国語の1語に対応する例」の中で、「癖」と「病みつき」を取り上げ、その分析結果を紹介した。

2) 第2回FD研修会

日時：2015年2月3日（火）午後3～4時

場所：国際言語センター301号室

講師：浮葉正親名古屋大学教授

題目：「日本文化」の教え方～「日本事情」教育の視点から

内容：

1990年代後半から2000年代にかけてさまざまな問題提起がなされた「日本事情」教育をめぐる議論をふり返り、教室で日本の文化や社会について教える際の注意点を確認した。

1999年から2003年まで刊行された『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』（くろしお出版、5号まで）とその後続誌である『リテラシーズことば・文化・社会の日本語教育へ』（同前、4号まで、2005年から2009年）では、「日本事情」をめぐるさ

まざまな問題提起がなされた。特に、文化を社会の所産であると捉えるのではなく、言語活動のプロセスにおける個人の状況認知そのものであるとする細川英雄の「個の文化」をめぐる議論は、いくつかの批判はあるものの、今日なお「日本事情」教育をめぐる議論の基点として参考になる部分が少なくない。

ただし、日本語教育の世界では、2010年代に入ってから「日本事情」という用語があまり使われなくなっ

ている。その代わりに「社会」という言葉がキーワードとして使われるようになり、教室での活動を現実の社会とどのように連結させることができるのかという問題意識が高まっている（例えば、佐藤慎司・熊谷由里編『社会参加をめざす日本語教育 社会に関わる、つなげる、働きかける』ひつじ書房・2011年）ことをこの研修会では紹介した。

第70期（2014年4月期）日本語研修コース

鹿 島 央

2014年度4月期の大使館推薦の研究留学生は30名で、文系部局15名、理系部局15名で、29名が名古屋大学、1名が南山大学へ進学する留学生であった。文系部局では、国際開発研究科が9名と昨年4月期と同数、国際言語文化研究科4名、経済学研究科、南山大学が各1名であった。理系部局では、工学研究科8名、農学研究科3名、医学研究科2名、環境学研究科が2名であった。今期は30名のうち、18名が初中級レベル以上の既習者であった。

1. 研修生

A. 大使館推薦（研究留学生）

文部科学省より配置された大使館推薦の国費研究留学生は、21ヶ国30名（ブラジル4名、オーストラリア、フィリピン各3名、インドネシア、ベトナム各2名、カンボジア、イタリア、ウガンダ、エストニア、エジプト、コロンビア、ザンビア、中国(香港)、タジキスタン、トルコ、ハンガリー、パキスタン、東ティモール、マレーシア、ルーマニア、レソト各1名）であった。今回、30名のうち20名が全学向けの日本語講座を受講したが、内2名は研究の都合上初級レベルを選択した留学生であった。全学日本語コースでの内訳は、SJ101a（全学標準日本語初級前半）1名、IJ111a（全学集中日本語初級前半）1名、IJ112（全学集中日本語初級後半）5名、IJ211（全学集中日本語中級前半）2名、IJ212（全学集中日本語中級後半）2名、SJ202（全学標準日本語中級後半）1名、SJ300（全学標準日本語中上級）4名、SJ301（全学標準日本語上級）4名であった。

以上のように、第70期は研究留学生30名のうち10名が日本語研修コース、残り20名は全学向け日本語講座を受講した。

2. クラス編成

授業は、昨年度と同じく2クラス編成とし、専任教員3名、非常勤講師7名の計10名が担当した。

3. 時間割と日程

授業はこれまでのように月曜日から金曜日まで、午前8時45分から午後2時30分まで90分授業を3コマ行った。

コースの日程は以下の通りである。

4月9日（水）開講式、4月10日（木）授業開始、夏季休業7月28日（月）～8月29日（金）、9月1日（月）授業再開、9月9日（火）修了式

開講式の前行う到着時のオリエンテーションは、4月4日（金）と7日（月）に行った。プリオリエンテーションでは、名古屋大学での日本語教育の全体像および日本語研修コースの概要を説明し、その後、未習者には学習背景アンケート、既習者にはプレースメントテストおよびインタビュー、さらに学習背景アンケートも行った。今期は既習者が多かったため、他の専任1名と分担してインタビューを行い、全学日本語コースの選択について各留学生に提案をした。

4. カリキュラム

カリキュラムは、これまでのように（1）主教材 *A Course in Modern Japanese [Revised Edition], Vols. 1 & 2*（名古屋大学日本語教育研究グループ編）を中心とする授業、（2）その他の活動（テーマにそって一人ずつ書いて話す：楽しかったこと、趣味、国の観光地、国との習慣の違い）（3）専門について話す、の3つで構成した。

進度は、これまでと同じように夏休み前に主教材が終了するカリキュラムとし、最終テスト、話すテスト

を行った。筆記テストのチェックは夏休み前に行った。

以下、概要と修了アンケート（80%回収）の結果について報告する。

(a) 教科書を中心とする授業（1～14週）

教科書については例年のように、項目が多いがとても有用な教材であるという評価が多かった。

・ Drill

Notes on grammar は文法の説明であるが、この部分の理解が予習段階ではむずかしく、授業内での教師の文法説明がとても役に立ったというコメントがあった。例年ドリルにかけける時間数は調整しているが、90%はおおむね「よかった」と回答している。

・ Dialogue

Dialogue はほぼ全員が役立つというコメントであったが、もっと映像を取り入れてほしいという要望もあった。

・ Discourse Practice & Activity

Discourse Practice は、実際の場面を想定したロールプレイを、教師と対面で、あるいは電話を使用して行う活動である。授業の欠席の許可をもらう練習、指導教員と面会のアポイントを面前で、あるいは電話でとる、さらに友達との約束を電話で断る練習である。日常生活で役立つとのコメントがあった。

・ Aural Comprehension

各課の Aural Comprehension は、宿題として事前に解答してくるようになってきているが、状況説明などの簡単な導入をしてほしいというコメントがあった。「よかった」という回答が多かった。

・ Reading Comprehension

最後の5課が難しいことと、英訳が必要というコメントもあった。

・ WebCMJ

コンピュータを使った WebCMJ での文法練習は、10課までは復習として Drill 終了後にスケジュールに組み込んだ。11課からはこれまでのように自習とした。

・ ひらがな

ひらがなは、導入後ひらがなテストを実施し、90%以上の得点をとるまで繰り返した。2回以上繰り返した学生はいなかった。

・ 漢字および漢字セミナー

300字の導入と練習はこれまで通りである。教え方は教師により様々であるが、90%ほどが満足しているとの回答であった。『KANJI&KANJI』を貸し出しているが、今期は35%ぐらいの使用率で、ほとんどは iPhone などの電子機器を用いている。ただ、漢字の時間に配布しているハンドアウトは役立つとのコメントがあった。

・ Dictation

5課まではこれまでのように録音素材を用いた方法とし、6課からは文レベルを教師が口頭で発話する形とした。

(b) その他の活動

・ 話す練習

話すテーマは（「楽しかったこと」「趣味について」「国の観光地」「国との違いについて」）それぞれについて原稿を書き、話す活動として口頭発表を行った。ほぼ全員が「よかった」という回答で、実際に旅行するともっとよいのではというコメントがあった。

日本人ゲストにインタビューする活動も2度行った。もっと機会を増やしてほしい、おもしろい経験ができたなどの回答があった。

Talking Time は、単調であった、むずかしい、もっと学生に話をさせる方法があるのではという回答もあった。全般的には75%が満足しているものの、さらに改善の余地がありそうである。

・ 文化の紹介

日本の1年の「年中行事」について、ビデオをみて紹介した。

(c) 「専門について話す」（第15週目）

この活動は、各留学生在持ち時間8分（質疑応答も含む）で自分の専門領域について発表するプログラムである。90%が「語彙をふやすのによい」など役に立つとの評価であった。研修コースでは、専門について日本語で読む授業が必要かという質問をしているが、今期は67%が不必要であると回答している。専門は英語でいいというコメントであった。

5. アンケート結果

10名のうち、8名から回収した。

(1) コースの満足度

4段階で評価してもらった。「3:とても満足」から「0:まったく満足しない」で、8名中5名が「3」、
「2」の評価が3名であった。

(2) 自身の学習成果への満足度

4段階の評価で、「3:とても満足」から「0:まったく満足しない」。8名中4名が「3」、4名が「2」の評価であった。全体的には、期待していたのと同じぐらいのレベルだと回答した学生が5名、他の3名は期待以上のレベルになったとの回答であった。

(3) アンケート項目

①今回のアンケートでも「この6カ月間、どのようにしてモチベーションをたもつことができましたか」という項目を入れた。以下のようないくつかの回答である。

- ・必要なスキルだから
- ・must だから
- ・いつも必要だと思っていたから

・とにかくがんばった

・とても大事だから

②「このコースを次の学生にも勧めますか」という質問には、7人が「はい」としているが、学生の優先度によるとのコメントもあった。

6. まとめと問題点

どのようにクラスの人数、配置を考えるのかは、その時々々の構成メンバーの性格や人格に影響されることがあり、悩ましい問題である。1クラスだけであれば、クラスのメンバーを変更したりすることはできないが、研修コースのように2-3クラス体制で運営する場合には、どのように運営するのが効率的か、あるいはスムーズにストレスなく、いい雰囲気のもとで授業が進められるのかを考えると、クラスメンバーを交替する必要も出てくる。今期も例年あることではあるが、入試を控えた学生への対応で、思うように日本語学習に時間が使えず苦勞している学生がいた。このような学習者に対して、最大限の配慮しながらいい学習環境を整えることができたのか、コーディネーターとしての責任について考えさせられた。

第71期（2014年10月期）日本語研修コース

衣 川 隆 生

1. 研修生

A. 大使館推薦（研究留学生，教員研修生）

文部科学省より配置された大使館推薦の国費留学生は、13ヶ国22名（韓国7名，パキスタン3名，インドネシア2名，インド，ガーナ，コスタリカ，ジンバブエ，ナイジェリア，フランス，ブルガリア，ボリビア，ミャンマー，中国各1名）で，うち6名は日韓理工系学部予備教育生である。残り16名のうち，11名が教員研修生で，残りの5名が研究留学生であった。進学先は名古屋大学4名，名古屋市立大学1名，愛知教育大学11名であった。今回の研修生の16名（日韓理工系部生を除く）のうち，4名は全学向けの日本語講座を受講した。全学日本語コースでの内訳は，IJ112（全学集中日本語初級後半）1名，IJ212（全学集中日本語中級）2名，SJ300（全学標準日本語中上級）1名であった。

B. 学内公募（国費留学生）

今期も法学研究科から国費英語コース留学生2名を受け入れた。事前にオリエンテーションを行い，日本語研修コースを受講することに決定した。

以上のように，第71期日本語研修コースは国費大使館推薦留学生12名，学内推薦留学生2名の合計14名でスタートしたが，研究指導の関係から11月から1名の学生がSJ101（全学標準日本語初級前半）に移動し，以降は13名で授業を行った。

2. クラス編成

授業は，2クラス編成とし，専任教員3名，非常勤講師7名の計10名が担当した。

3. 時間割と日程

時間割は，第69期にならい，ほぼ例年の10月期と同様である。

コースの日程は以下の通りである。

10月7日（火）開講式，10月8日（水）授業開始，冬期休業12月22日（月）～1月6日（火），1月7日（水）授業再開，2月5日（木）授業終了。3月2日（月）修了式。例年より早めに12月4日（木）に愛知教育大学での交流会に留学生11名と参加した。

4. カリキュラム

今期の授業内容は，教科書を用いた授業はほぼ例年の10月期と同様であったが，例年最終週に行っていた「専門について発表する」という活動を行わず，ビデオ作成プロジェクト「第71期日本語研修コース紹介」を実施した。このプロジェクトでは，留学生が主体となりクラスメート，教室，日本語プログラム，国際言語センター，名古屋大学など紹介したい人や場所を決定し，台本作成，練習，撮影を行うというものである。作成したビデオは修了式当日に会場でも上映された。

以下，修了アンケートの結果とともに授業内容を報告する。

(a) 教科書を中心とする授業（1～14週）

教科書については半数以上の学生がよかったと答えているが，「ところどころ説明がわかりにくい」，「早い」，「難しい」というコメントを記述している学生もいた。

・ Drill

事前に文法の説明に目を通してから授業に臨むことを学生には求めているが，予習の時間が十分に持てないとのコメントもあった。また「いくつか翻訳が不明確で理解できない」という声もあり，この点は改訂に繋げていく必要もある。

・ Dialogue

ほぼ全員がよかった，と答えているが，内容をより日常的なものにすべきである，というコメントもあった。

・ Aural Comprehension

Aural Comprehension に関しては、よかったと答えた学生が半数程度いるものの、「未習語も多く、時間がかかる」、「もっと少なく」というコメントを書く学生も少なからずいた。

・ Reading

Reading に関しても、よかったというコメントを半数以上の学生から得られたが、「少なくすべき」というコメントもあった。

・ 漢字

漢字に関しては、「認識よりも書くことを重視すべき」というコメントと、それとは逆のコメントも得られた。どちらのコメントを書いた学生からも、指導方法の再考を求める意見が出され、これらの意見は今後検討すべき課題である。また、漢字辞書の使い方も従来の方針に従い紹介されたが、ほとんどの学生が紙媒体の辞書は使っていないという結果も得られた。

・ WebCMJ

例年通り、11課からは自習としたが、ほとんどの学生が利用し、また、非常に役に立つという評価が得られた。

(b) その他の活動

・ 話す練習

Discourse Practice & Activity に関しては、「非常に役に立った」という評価が得られた。スピーチアクティビティに関しても「一番好きな活動です」というコメントが得られるなど、発話に重点を置いた活動は高い評価を得られた。しかしながら、自由記述欄には「Oral Skill にもっと時間を使うべき」、「映像教材を増やしてほしい」「リアルなコンテキストでの話す練習を増やすべき」、「ゲストセッションを増やすべき」など話す練習について多くの意見が寄せられている。これらの改善も視野に入れる必要がある。

・ ビデオ作成プロジェクト

ビデオ作成プロジェクトに関しては、全員が高い

評価を付けている。今回は初めての試みであり、改善すべき課題も見つかってはいるが、今後も一つの活動として位置づけていきたい。

5. アンケート結果

今期は12名の学生から回答が得られた。

(1) 自身の学習成果への満足度

4段階で評価してもらった。「3:とても満足」から「0:まったく満足しない」で、3名が「3」、8名が「2」、1名が「1」の評価であった。3名はコースが始める前に比べて「期待していたより、ずっとできるようになった」と答えており、2名が「できるようになった」、4名が「期待通り」と答えている。

(2) この日本語研修コースを次に来る学生にも勧めるかどうかという質問については、11名の学生が進めると答えているが、1名の学生は拘束時間の短い全学向けを勧めるという回答している。

6. まとめと問題点

今期はコーディネーターが交代したこともあり、従来との単純に比較することは難しいが、教員研修留学生が多い、という点はここ数年の傾向と同様である。また、法学研究科の留学生を受け入れることも従来と同様の措置である。しかしながら、法学研究科のゼミ等の拘束も多く、学期途中からは、欠席が目立つようになった。これは昨年度と同様の傾向である。大学院の入試体制が多様化し、また準備期間も短くなっていることは、法学研究科の留学生だけではなく、他の研究留学生においても同様であろう。入試と日本語の学習を両立させなければならない研究留学生と、教員研修留学生が同じコースで学習していることは、全体のカリキュラムをデザインする上で、大きな制約となる。どちらの留学生にも対応可能な可変的なプログラムを今後検討する必要がある。

第33期 上級日本語特別コース (2013年10月～2014年9月)

初 山 洋 介

第33期上級日本語特別コースは、「上級レベルの日本語能力の習得(話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって)」「日本に関する基礎的理解」「各自の専門分野の基礎的な研究方法の習得と実践」の3つを目標として行われた。

学習者は、13カ国、19名(インド:3名, ベトナム:3名, チリ:2名, ブラジル:2名, インドネシア:1名, ウクライナ:1名, ウズベキスタン:1名, 韓国:1名, キルギス:1名, セルビア:1名, チェコ:1名, 中国1名, ニュージーランド:1名)であった(なお、このうちの1名は全学日本語プログラム(集中コース)を受講した)。また、10名の教員が指導に当たった。

以下、主要なプログラムおよびアンケートの結果などについて概説する。

(1) 教科書による日本語学習 (10月～4月)

『現代日本語コース中級Ⅰ』『現代日本語コース中級Ⅱ』(名古屋大学日本語教育研究グループ編)、『現代日本語コース中級Ⅰ 聴解ワークシート』『現代日本語コース中級Ⅱ 聴解ワークシート』(名古屋大学日本語教育研究グループ編、名古屋大学出版会)を教科書として日本語学習を行った。補助教材として、「プリテスト(予習のチェック)」「プリテスト:補足(連語など)」「復習クイズ」「文法補足説明」を使用した。また、3課ごとにテスト(筆記テストおよび話すテスト)を実施した。話すテストについては、録音に基づき個別指導も行った。

(2) 応用会話 (10月～4月)

教科書の会話が大学などの限られた場におけるものであることから、社会における様々な場における会話力(表現力、運用能力)を高めることを狙いとして、「応用会話」を行った。教材として、各種のモデル会話などを作成し、使用した。

(3) 入門講義・特殊講義 (10月～7月)

日本に関する基礎知識を身に付けること、レポートのための基礎知識および基本的な研究方法を習得することを狙いとして、10月～2月(前期)および4月～7月(後期)の期間、それぞれ5つの分野の入門講義を14回(各90分)行った。前期は、「日本文化論Ⅰ」「国際関係論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「言語学Ⅰ」「日本文学Ⅰ」であり、後期は、「日本文化論Ⅱ」「国際関係論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「言語学Ⅱ」「日本文学Ⅱ」であった。学生は、前期は5科目のうち3科目以上を選択、後期は5科目のうち2科目以上を選択することとした。なお、入門講義は全学留学生が受講できるものであり、大学院研究生、短期交換留学生などとともに受講した。

また、特殊講義(必修)として「音声学」(90分×7回)を行った。

(4) 作文(レポートのための基礎訓練) (1月～4月)

レポート作成に必須の基礎知識を体系的に身に付けることを狙いとして、「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「論文・レポートに役立ついろいろな表現」「文末表現の諸相」「図やグラフの説明の仕方」「引用の仕方」「要約の仕方」「論文で使われる言葉」などについて学習した。

(5) 発展読解 (10月～4月)

発展読解として、「精読」(教科書の読解教材に代わるもの)、「新聞読解」、「問題付き読解」(生教材に読解の手助けとなる問題を付したもの)、「本の読解」(エッセイ・小説など、教員が用意したものの中から、学習者が興味のあるものを選択)、「特別読解」(学習者が、新聞などから自分で記事を見つけ、授業でも教師役をする)などを行った。

(6) スピーチ (10月～7月)

自国の紹介、自分がふだん考えていることをはじめとする様々なトピックについて、学生がスピーチを

行った（1人，1回，10分程度，スピーチ後に質疑応答）。

(7) レポート（1月～7月）

学生各自がテーマを決め，教員の個別指導のもとでレポートを作成した。分量はA4，15～30枚程度である。なお，今期も，「論文」「随筆」「創作」「報告」という4つのカテゴリーの中から，学生が1つを選んで取り組むこととした。その内訳は，論文：14名，随筆：3名，創作（小説）1名であった。なお，創作は大変な力作であった。研究成果は『2013～2014年度日本語・日本文化研修生 レポート集』（434ページ）として発行した。また，中間発表会（5月，発表：20分／質疑応答：10分），最終発表会（7月，発表：25分／質疑応答：5分）を実施した。レポートの題目は以下の通りである。

(1) 論文

1. アフマド・ソリフリジャル（インドネシア）「謙讓表現「(さ)せていただく」における意味拡張の考察——話者の表現意図の観点から——」
2. ガジェンコ・インナ（ウクライナ）「場面と敬語の使用・不使用」
3. ゴンザレスピノ・クラウディア（チリ）「日本の接客——アパレル業を中心に——」
4. サルカル スリジータ（インド）「『よだかの星』の分析」
5. ダダホノウァ ナルギザ（ウズベキスタン）「トヨタの戦略イノベーションとしてのエコカー」
6. タン ニ（中国）「日本の高齢者の就業——健康で働く意欲のある高齢者を対象に——」
7. デイン・ティ・ミン・タム（ベトナム）「日本の和の文化」
8. ハ・バオ・アイン（ベトナム）「『床の間』と日本人の精神」
9. バイブラエワ・ジャミーリヤ（キルギス）「ボランティア活動」
10. パブロヴィッチ・ダルコ（セルビア）「名古屋の人神信仰——豊国神社を中心に——」
11. ファン ソユン（韓国）「『一人空間』に見る日本人」
12. ボムラ マシエル・アリネ テルミ（ブラジル）「ブラジル人学校における日本語教育」
13. ミルカ・ズベデリーコバー（チェコ）「日本の高校

における英語教育」

14. ラフル・グプタ（インド）「日本の生徒の放課後」

(2) 随筆

1. ジューリアン・エマ（ニュージーランド）「日本旅行：おもてなしの体験」
2. クルカルニ・ケートン・シリーシュ（インド）「私の留学生活」
3. ファム・ティ・フエン・チャン（ベトナム）「外国人から見た日本人の恥の文化」

(3) 創作（小説）

1. リーワ・ホー（チリ）「キツネの冒険」

(8) 総合演習（5月～7月）

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして，前期と後期の両学期に総合演習を行った。教材は新聞・雑誌の記事やテレビ番組などを使用し，学生は多様な言語活動を行った。テーマは以下の通りである。

前期：「名古屋の食べ物について調べる」（1週間）

後期：「ことばと遊び」（1週間），「やきものとそれにのせるもの，入れるもの：ジンを通して東海地方の特産物を知ろう」（3週間），「日本人とスポーツ：心技体の世界」（1週間）

なお，「やきもの」についての総合演習では，6つのグループに分かれて，調査・インタビュー等を行い，ジンを作成した。調査担当者，ジンのタイトルは以下の通りである。

- (1) アフマド，ナル，ソユン「のりのりで行こう！ノリタケの森」
- (2) タム，インナ，タンニ「ようこそ瀬戸市へ：セトモノ」
- (3) アイン，エマ，スリジータ「常滑焼」
- (4) ケータン，ダルコ，ミルカ「多治見市の焼き物」
- (5) アリネ，クラウディア，ジャミーリヤ「やきもの里：土岐市」
- (6) チャン，ラフル，リー「四日市の一日」

(9) 漢字テスト・漢字コンクール（10月～7月）

漢字学習を計画的に進めることを狙いとして，「漢

字テスト」(20回)を行った。また、漢字学習をさらに活性化することを狙いとして「漢字コンクール」(4回)を実施した。

(10) その他

以上に加えて、独話練習、討論会(ディベート)、ことばのクラス(ゲームなどを通して日本語力を高めるプログラム)なども行った。さらに、本学の学部生向けに開講されている教養科目の1つである「留学生と日本：異文化を通した日本理解」にも参加した。

(11) アンケート

2014年7月に、学習者に対して、コースの内容などに関するかなり詳細なアンケートを行った。以下、「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問のみについて、アンケート結果を紹介する。

満足度	満足していない		満足している	
評価	0	1	2	3
回答者数	0人	1人	12人	5人

(12) 今後の課題など

まず、昨年度まで、上記の「総合演習」を、コースのもっと早い時期からやりたかったと述べた学生が少なくなかったことを受け、今年度は、12月にも総合演習を実施した。名古屋の食べ物について、どのグループも意欲的に調査を行い、興味深い発表も行った。また、この時期に総合演習を行ったことは、学生からも好評であった。さらに、5月～7月の総合演習にも積極的に取り組み、ジンの出来栄も期待以上であった。

一方、これまでも上級レベルの文法・語彙の体系的な学習(N1対策にもなるもの)を希望する学習者が少なくなかったが、今年度もこのような希望に応えることはできなかった。来年度には、何らかの形でこのような希望に応えられるように準備を進めていきたい。

全学向日本語プログラム 2014年度

李 澤 熊

全学向日本語プログラムは、名古屋大学に在籍する留学生(大学院生、研究生など)、客員研究員、外国人教師などを対象に、日常生活や大学での研究生生活に必要な日本語運用能力の養成を目指して開講されている。

2014年度は昨年度に引き続き、日本語プログラムを見直し、効率を図るとともに、全学留学生を対象とする全学向日本語講座の拡充計画を立案し、実施した。

1. 2014年度の概要

1) 2014年度は、前期・後期に「集中コース (IJ コース)」と「標準コース (SJ コース)」を開講し、アラカルト授業として「オンライン日本語コース」「漢字コース」「入門講義」「ビジネス日本語コース」を開講した。集中コースは、短期交換留学生の受講が多いということもあり、週20時間4レベル6クラスを設けた。なお、集中コースはすべて午前の開講となった。

標準コースは、7レベル10クラスを設けた。初級Ⅰ、上級レベルについては受講者が多かったため、2クラス体制をとった。なお、「グローバル30コース」に対応するために、標準コースの一部 (SJ101～

SJ202) の開講時間帯を午前に変更した。

- 2) 例年と同様、初級Ⅱ以上を希望する受講者を対象にクラス分けテストを実施し、日本語能力レベルに応じたクラス編成をした。なお、今年度もクラス分けテストの会場を2つ設け、上級レベルを希望する者については、別途にテストを実施した。
- 3) 各クラスにおいて、出席および成績の管理を行い、授業終了時に出席および成績から合格者を発表し、合格者は次期進級する際クラス分けテストを免除している。再履修者についても同様である。ただし、上級における再履修者は定員を超える申し込みがあった場合、受講を制限することになっている。
- 4) 全学向日本語プログラムは、基本的には単位取得をする授業ではないが、短期交換留学生に関しては、別途に単位認定基準を設け、単位認定を行った。全学向け日本語プログラムと NUPACE 日本語の成績処理方法を統一し、コース運営の効率化を図った。
- 5) 「学生の出入りが激しい」という問題点を解消するために、登録の時に指導教員による「受講承諾書」の提出を義務化した。
- 6) FD 活動の一環として学生によるコース評価をレベル・科目別に行った。

2. 期間と内容

- 1) 前期開講期間：2014年4月14日(月)～7月29日(火) 14週間
- 2) 後期開講期間：2014年10月13日(月)～2015年2月2日(月) 14週間
- 3) 開講クラスと内容：

コース 科目	レベル クラス数	目 標	教 材
標準コース (standard)	初級Ⅰ SJ101	日本語がほとんどわからない学生を対象に、日本語文法の初歩的な知識を与えると同時に日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字100字、単語数800語)	<i>A Course in Modern Japanese, [Revised edition] Vol. 1 & CD</i>
	初級Ⅱ SJ102	初級Ⅰ修了程度のレベルの学生を対象に、さらに基礎日本語の知識を与えると同時に日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字150字、単語数900語)	<i>A Course in Modern Japanese, [Revised edition] Vol. 2 & CD</i>

コース 科目	レベル クラス数	目 標	教 材
標準コース (standard)	初中級 SJ200	初級Ⅰ、Ⅱで学んだ文法事項の運用練習を行うとともに、中級レベルで必要となる漢字力、読解力を含め、日本語運用能力の基礎を固める。(漢字200字, 単語数1000語)	国際言語センター開発教材
	中級Ⅰ SJ201	初中級修了程度のレベルの学生を対象に、日本語の文法を復習しつつ、4技能全般の運用能力を高める。(漢字300字, 単語数1200語)	『現代日本語コース中級Ⅰ』
	中級Ⅱ SJ202	中級Ⅰ修了程度のレベルの学生を対象に、日本語の文法を復習しつつ、大学での勉学に必要な日本語能力の基礎を固める。(漢字400字, 単語数2000語)	『現代日本語コース中級Ⅱ』
	中上級 SJ300	中級Ⅰ、Ⅱで学んだ学習項目を実際の場面で使えるよう運用練習を行い、上級レベルの日本語学習の基礎を固める。(漢字500字, 単語数3000語)	国際言語センター開発教材
	上級 SJ301	中上級修了程度の学生を対象に、大学での研究や勉学に必要な口頭表現、文章表現の能力を養う。(漢字800字, 単語数4000語)	国際言語センター開発教材
集中コース (intensive)	初級Ⅰ IJ111	日本語がほとんどわからない学生を対象に、日本語文法の初歩的な知識を与えると同時に日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字150字, 単語数800語)	<i>A Course in Modern Japanese, [Revised edition] Vols. 1, 2 & CD</i>
	初級Ⅱ IJ112	標準コース初級Ⅰ修了程度の学生を対象に、日本語文法の基礎を固め、日常生活だけでなく勉学に必要な基礎的日本語運用能力を養う。(漢字250字, 単語数1000語)	<i>A Course in Modern Japanese, Vol. 2 & CD, 作成教材</i>
	中級Ⅰ IJ211	集中コース初級Ⅰまたは標準コース初級Ⅱ修了程度の学生を対象に、日本語の文法を復習しつつ、4技能全般の運用能力を高める。(漢字300字, 単語数1200語)	『現代日本語コース中級Ⅰ』および国際言語センター作成教材
	中級Ⅱ IJ212	集中コース初級Ⅱまたは標準コース初中級修了程度の学生を対象に、4技能全般の運用能力を高め、研究に必要な日本語能力の基礎を固める。(漢字400字, 単語数2000語)	『現代日本語コース中級Ⅰ・Ⅱ』
漢字コース (kanji)	漢字1000 KJ1000	漢字300字程度を学習した学生を対象に、日本語能力試験N3-N2程度の漢字1000字を目標に学習する。	『漢字マスター Vol. 3 2級漢字1000』
	漢字2000 KJ2000	漢字1000字程度を学習した学生を対象に、日本語能力試験N2の上からN1程度の漢字約2000字およびその語彙を学習する。	『日本語学習のためのよく使う順 漢字2100』
入門講義 (introductory)	次の専門分野を日本語でやさしく解説する講義形式の授業である。日本語運用能力を高めるとともに、日本理解を助ける科目である。標準コース中上級レベル以上の日本語能力が受講資格である。		
	国際関係論Ⅰ・Ⅱ IR200	Ⅰ：グローバリゼーションは開かれた社会・経済を推進し、商品、思想などが縦横無尽に世界を駆け抜ける。さらに、ネットワーク社会の出現は人権やアイデンティティー意識の高揚をもたらしている。しかしながら、グローバリゼーションの行く末を案ずる声も大きくなってきている。グローバリゼーションをめぐる賛否両論を紹介する。 Ⅱ：グローバリゼーションをキーワードとして、いくつかの認識方法を手がかりに、現代国際環境の変容を見る。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
	日本文化論Ⅰ・Ⅱ JC200	Ⅰ：この講義では、日本の家族や学校をめぐる最近の問題を取りあげ、受講者の出身国の事例と比較しながら、日本の社会や文化の特徴を議論していく。取りあげるテーマは、夫婦別姓、国際結婚、いじめ、不登校、フリーターなど。 Ⅱ：日本の社会や文化の特徴をより深く理解するために、韓国を比較の対象として取りあげ、東アジアにおける「近代」(西洋文明との出会い)の意味を考える。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
言語学Ⅰ・Ⅱ GL200	Ⅰ：主に現代日本語を素材として、言語学の基礎を学ぶ。取り上げるテーマは、言語学の基本的な考え方、人間の言葉の一般的特徴、言葉の意味(意味論)、言葉と社会(社会言語学)、世界の言語と日本語(言語類型論)である。 Ⅱ：言語学の一分野である意味論(認知意味論を含む)について学ぶ。特に、現代日本語を素材として、類義表現・多義表現などの分析方法を身につけることを目指す。	講読文献などは授業中に適宜指示する。	

コース 科目	レベル クラス数	目 標	教 材
入門講義 (introductory)	日本語学Ⅰ・Ⅱ JL200	Ⅰ：主に日本語教育で問題となる文法項目を取りあげ、整理・検討することによって、文法の基本的知識を身に付けることを目標とする。取りあげるテーマは品詞、ボイス、テンス、人称、活用等 Ⅱ：主に日本語教育で問題となる文法項目を取りあげ、整理・検討することによって、文法の基本的知識を身に付けることを目標とする。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
	日本文学Ⅰ・Ⅱ NL200	Ⅰ：日本の詩歌について、万葉集（日本最古の和歌集）からJ-POPの歌詞まで、時代を追って鑑賞する。奈良時代から江戸時代までを概観する。 Ⅱ：日本の詩歌について、万葉集（日本最古の和歌集）からJ-POPの歌詞まで、時代を追って鑑賞する。明治時代から現代までを概観する。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
オンライン・ 日本語コース	・中上級読解作文 OL300 ・オンライン漢字 OLkj	中級レベルを修了した学習者を対象に、400字～600字程度の文章の理解とその文章の要約や関連作文を課し、文章表現能力を養う。 初中上級レベルの学習を修了した学習者を対象とした漢字のクラスを開講している。毎週1回オフィスアワーを開設する。	Moodle版日本語教材
ビジネス日本語 Business	ビジネス日本語 Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ BJ400	将来、日本の企業に就職を希望する人はもちろん、日本人のビジネスコミュニケーションに対する理解を深めたい留学生を対象とし、日本のビジネス・マナー及びビジネスで用いられる日本語表現を身につける。	Ⅰ：『ビジネスのための日本語・初中級』 Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ：『新装版 商談のための日本語・中級』

(入門講義科目の「Ⅰ」は秋学期に、「Ⅱ」は春学期に開講する。)

3. 受講生数

1) 標準コース

	前期		後期		
	登録者数	修了者数	登録者数	修了者数	
初級Ⅰ（2クラス）	31	23	初級Ⅰ（2クラス）	52	43
初級Ⅱ	26	16	初級Ⅱ	20	16
初中級	16	10	初中級	18	9
中級Ⅰ	25	17	中級Ⅰ	33	24
中級Ⅱ	33	24	中級Ⅱ	31	15
中上級	34	24	中上級	38	26
上級	54	29	上級	55	30
漢字1000	37	17	漢字1000	45	29
漢字2000	30	17	漢字2000	25	12
国際関係論	25	11	国際関係論	43	27
日本文化論	48	33	日本文化論	58	41
言語学	37	24	言語学	39	18
日本語学	40	21	日本語学	38	27
日本文学	38	28	日本文学	45	29
ビジネス日本語Ⅱ	40	16	ビジネス日本語Ⅰ	39	22
ビジネス日本語Ⅳ	27	17	ビジネス日本語Ⅲ	30	17
Online 日本語	45	24	Online 日本語	43	22
計	586	351	計	652	407

2) 集中コース

	前期		後期		
	登録者数	修了者数	登録者数	修了者数	
初級Ⅰ・Ⅱ（2クラス）	20	20	初級Ⅰ・Ⅱ（2クラス）	39	38
初級Ⅱ・初中級	16	11	初級Ⅱ・初中級	18	15
初中級・中級Ⅰ（2クラス）	18	17	初中級・中級Ⅰ（2クラス）	24	20
中級Ⅰ・Ⅱ	25	21	中級Ⅰ・Ⅱ	19	17
計	79	69	計	100	90

4. 学生によるコース評価

昨年度と同様に授業改善と教授能力の向上を図るために、前期と後期に受講者を対象に、コース内容に関するアンケートを実施した。回答者数（短期交換留学生を含む）は前期と後期、それぞれ136名と135名である。

アンケートの内容はレベルによって異なるが、各レベルに共通して尋ねた質問のうち3つの項目について報告する。

質問1：勉強したことがよく理解できたと思いますか。

質問2：授業内容は自分にとって役に立ったと思いますか。

前期

	Q1	Q2	合計
そう思う	56	65	44%
どちらかといえば「はい」	47	51	36%
どちらとも言えない	30	16	17%
どちらかといえば「いいえ」	3	4	3%
そう思わない	0	0	0%
回答者合計	136	136	100%

後期

	Q1	Q2	合計
そう思う	59	83	54%
どちらかといえば「はい」	56	37	35%
どちらとも言えない	10	8	7%
どちらかといえば「いいえ」	7	2	3%
そう思わない	0	2	1%
回答者合計	132	132	100%

以上の結果から分かるように、全般的に良好な評価結果が得られた。ただ、受講者によっては「科目によってはテストの回数が多すぎる」「上級クラスは学生のレベル差が大きい」というような指摘もあった。今後、このようなニーズに対応していくために、さらに工夫

が必要であろう。

質問3：日本語の授業について意見やアドバイスがあったら書いてください。

この質問には様々な回答があったが、全般的に寛大な評価が多かった。しかし、中には以下のような要望も出ており、今後さらなるプログラムの改善に努める必要があると感じた。

- ・「日本語能力試験の準備のための授業があったらいいと思う」
- ・「日本の文化・習慣・考え方についても知りたい」
- ・「中級レベルでも作文の授業を設けてほしい」
- ・「専門性のある授業をもっと設けてほしい」

5. 今後の課題

以上のように、2014年度は昨年度の実施結果を踏まえ、留学生の多様なニーズに対応するために、さらにコースの改善を図った。例えば、特に初級レベルについては開講前の段階から受講者の情報をきちんと把握する必要があり、受講者名簿の記載内容・形式等を改善した。

しかし、スーパーグローバル大学事業の採択により、今後日本語教育へのニーズはさらに多様化するものと予想されるため、さらなる体制の整備が必要であると考えられる。

そこで来年度は、既存の日本語プログラムを見直し、さらに効率を図る予定である。まず、受講登録をより円滑に行えるように、ホームページを刷新する。また、後期の開講時期を全学の一般の授業日程とあわせることにより、スムーズなコース運営を図る予定である。

学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」

浮 葉 正 親

学部 に在籍する留学生が大学で所定の単位を取得していくためには、講義を聴く、ノートをとる、ゼミで発表する、レポート・答案を書く、ディスカッションをするなど、高度な日本語運用能力が要求される。授業ではそのための訓練を行うとともに、日本人学生や教員とのコミュニケーション能力の育成や日本社会・文化に対する理解を深めることを目的としている。

2014年言語文化科目「日本語」の科目および受講者数は以下の通りであった。

期	対象	内容	時間	担当者	受講者数
1期（1年前期）	文系	文章表現	月3限	國澤里美	13
		口頭表現	木3限	西田瑞生	13
	理系	文章表現	火2限	村上京子	7
		口頭表現	木2限	西田瑞生	3
	工学（国）	口頭表現	月2限	國澤里美	5
		文章表現	水2限	魚住友子	5
	工学（私）	文章表現	月2限	村上京子	9
		口頭表現	水2限	鷺見幸美	9
2期（1年後期）	文系	文章表現	金2限	國澤里美	14
		口頭表現	木3限	村上京子	16
	理系	文章表現	火2限	村上京子	6
		口頭表現	木2限	西田瑞生	3
	工学（国）	口頭表現	月2限	西田瑞生	5
		文章表現	水1限	魚住友子	5
	工学（私）	文章表現	月2限	國澤里美	9
		口頭表現	水1限	鷺見幸美	9
3期（2年前期）	文系	文章表現	火1限	浮葉正親	12
4期（2年後期）	文系	文章表現	木1限	浮葉正親	15

クラス

文系：文学部・教育学部・法学部・経済学部・情報文化学部社会システム情報科

理系：医学部・理学部・農学部・情報文化学部自然情報学科

工学（国）：工学部（国費留学生・政府派遣留学生）

工学（私）：工学部（私費留学生・日韓理工系留学生）

授業内容

1年前期

文系・文章表現

レポートを作成するために、文体・アカデミックワードなどの文章表現、引用・要約の仕方を学習した。実際に学習者がアウトラインを立て、それをグループで検討した上で、レジュメ・レポートを作成した。また、大学生活で必要な文章表現技術の向上を目指し

て、データ・資料の読解、説明文・意見文の作成を行った。さらに、依頼・提案・謝罪のメールの練習も取り入れた。

文系・口頭表現

大学生生活、とくに、学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズで魅力的な口頭表現ができるようになるための練習をした。とくに、構造的なわかりやすさということに注目し、いくつかのトピックを

話す場合に、同じトピックのものをまとめて話すグループリング、トピックをまとめたものを最初に話すラベリング、どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。比較と対照の表現や助詞相当語なども学んだ。

理系・文章表現

メールによる依頼文や連絡の文章、説明文、資料を活用した意見文など、大学生活で必要となる文章表現技術を協働活動を通して学習した。また、レポートを作成するために必要なアウトラインの立て方、引用・要約の仕方、レジюмеの作成など学んだあと、「春の数えかた」日高敏隆著（新潮文庫）を使って、レジюме作成、発表を行った。試験とポートフォリオによって評価した。

理系・口頭表現

大学生活、とくに、学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズな口頭表現ができるようになるための練習をした。とくに、構造的なわかりやすさということに注目し、いくつかのトピックを話す場合に、同じトピックのものをまとめて話すグループリング、トピックをまとめたものを最初に話すラベリング、どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。短く表現する方法や助詞相当語の使用法なども学んだ。

工学系（国費）・文章表現

読解能力と論理的文章作成の基礎力養成を目的に、日本の大学生・文化・社会や科学技術を扱った新聞等の読解、要約・意見・ポイントを整理して書く練習を行った。今年は、放射能問題、非正規雇用問題などの他、STAP細胞問題なども議論した。その他、板書文字、文体、句読点、原稿用紙やメール・レジюмеの書き方の学習、期末発表を行った。

工学系（国費）・口頭表現

自分の意見を効果的に伝えるために、スピーチ、ディスカッション、プレゼンテーションの仕方を学習した。具体的には、学習者が関心のあるニュース・トピックについて、情報を整理し、伝達する活動を行なった。また、それを踏まえてディスカッションも行なった。プレゼンテーションの実践では、発表の表現・

質疑応答の仕方を学び、レジюме・スライドを作成した。

工学系（私費）・文章表現

大学生活で必要な文章表現技術に関して協働活動を通して学習した。メールによる連絡・依頼文の作成、簡単な機械の使い方マニュアルなどの説明文の書き方、資料を活用した意見文などを書く練習を行った。また、レポートを作成するために必要なアウトラインの立て方、引用・要約の仕方、レジюмеの作成など基本的技能を段階的に学習し、試験とポートフォリオによって評価した。

工学系（私費）・口頭表現

1) 各自選択した新聞記事を題材に3分間スピーチを行った。録音・文字化したものをもとに、自己評価・他者評価を行った。2) 自律的学習能力の向上を目的とし、自己課題を設定し、毎週自らの取り組みを評価した。取り組みをノートに記録し、それを教師評価の対象とした。3) スライドを活用したプレゼンテーションの実践を通して、発表及び質疑応答の仕方を学んだ。テーマ設定から評価基準の設定まで協働的な活動を重視した。

1年後期

文系・文章表現

学習者が自分自身の関心に沿ってテーマを決め、必要な資料を収集し、レジюме・レポートを作成するという活動を複数回行なった。一連の活動において、グループでの検討・修正を行ない、自己修正できるようになることを目指した。また、前期で学習した内容を踏まえ、より高度な引用・要約の練習、意見文の作成、図表の説明を行なった。

文系・口頭表現

ロールプレイ、ディスカッション、ディベート、提言スピーチを通して、自分の意見を論理的、効果的に伝える口頭表現練習を行った。ディベートは学習者が設定したさまざまなテーマに関しルールに従い議論した。各学習者3回ずつ登壇し、その日のうちにeメールを使って録画ファイルを送った。学習者はそれを見ながら振り返り、改善案を考え、ポートフォリオを完成した。口頭試験とポートフォリオによって評価した。

理系・文章表現

実際の科学技術論文を読み、その中で使われる書式や表現を学習した。また、語彙・表現を増やす目的で学習者の関心のある書籍を多く読み、それに関するレジュメやレポート作成を実際に行った。文章の要約や引用の仕方、図表の作り方やその説明など、レポート作成のための文章を書く練習をおこなった。また、語彙・表現を増やすために多読を勧め、学習者は自習で読んだ新書や小説などを記録したポートフォリオを最終回に提出した。

理系・口頭表現

前期に引き続き、談話をわかりやすくする構造的な条件を考えながら、より魅力的に話す練習をした。プレゼンテーションソフトを使用し、スライドを見せながら話す練習、スライドなどを使用せずキーワードのみを提示して魅力を伝える練習をした。店舗と商品について、あるいは、映画について、ほかの人が興味をもつようなプレゼンテーションするというを通して、学生間でよいところを学びあった。

工学系（国費）・文章表現

さらに高度な文章表現能力の養成を目的に、図表の説明・引用・レポートの書き方を学び、レポートを2回作成・発表した。1回目はグループ作業で、資料丸写し防止と分析力養成のため、図表を元に分析して書いた。2回目は個人作業で、図表以外の文書資料も読んで書いた。どちらもテーマは自由とした。

工学系（国費）・口頭表現

大学生活、とくに、学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズで魅力的な口頭表現ができるようになるための練習をした。とくに、構造的なわかりやすさということに注目し、いくつかのトピックを話す場合に、同じトピックのものをまとめて話すグループング、トピックをまとめたものを最初に話すラベリング、どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。比較と対照の表現や助詞相当語なども学んだ。

工学系（私費）・文章表現

学習者が自分自身の関心に沿ってテーマを決め、必要な資料を収集し、レジュメ・レポートを作成すると

いう活動を複数回行った。一連の活動において、グループでの検討・修正を行ない、自己修正できるようになることを目指した。また、より高度な引用・要約の練習、意見文の作成、図表の説明を行なった。

工学系（私費）・口頭表現

ディベートを学期を通しての柱とし、並行して読書活動と言葉遊びを行なった。ディベートは、6つのテーマで行なった。毎回振り返りシートの記入を課題とした。読書活動では、授業外の課題として現代小説を一冊読み切ることを課し、授業では中間報告会と読後報告会を行なった。言葉遊びでは、川柳の鑑賞を通して、同音異義語や多義語、流行語、日常語についての知識を深め、最終的に各自川柳を作成した。

2年前期

文系・文章表現

日本社会・日本文化に関する文献等を読み理解を深めるとともに、レポートや卒業論文に必要な論理的な文章の書き方を学んだ。小学校での英語教育導入、大学生の就職活動をめぐる問題の中からテーマを選び、資料を読みながら、アウトラインと序文を作成した。

2年後期

文系・文章表現

前期で学んだ内容をふまえ、より高度な読解力、文章表現力の向上を目指した。要約と引用の方法を中心に学び、興味のある本の内容を紹介するレポートを作成した。ここ数年話題となった新書を十数冊準備し、選んでもらった。

授業アンケートの結果

例年のように、授業終了時に行われたアンケート結果では、ほぼ全項目において非常に高い評価を得た。主な項目を下に示す。(4点満点)

- ・この授業はシラバス等で説明された授業目標や評価方法に沿って行われましたか (3.9)
- ・この授業に意欲的・自発的に取り組むことができましたか (3.6)
- ・この授業で設定された学習内容を理解できましたか (3.8)
- ・担当教員の熱意や工夫を感じましたか (3.9)

短期留学生日本語プログラム 2014年度

石 崎 俊 子

1. 2014年度の概要

短期留学生は日本語プログラムを受講することで単位取得が可能である。2014年度においては、1日1コマの「標準日本語コース (SJ コース)」7レベル、1日2コマの「集中日本語コース (IJ コース)」4レベル、「漢字コース」2科目、「入門講義」4科目に加え、「ビジネス日本語」4科目、アカデミック日本語8科目において単位認定を行った。

このうち、標準日本語コースの初級レベル (SJ101, SJ102) と集中日本語コースの初級～初中級レベル (IJ111, IJ112) においては、総合的な日本語能力を身につけるために、週5日出席すること義務づけている。SJ101, SJ102は1日1コマ・週5コマ・全70コマのコースであり、これらのコースを修了した学生には5単位を認定している。また、IJ111, IJ112は1日2コマ・週10コマ・全140コマのコースであり、これらを修了した学生には10単位を認定している。

SJ200以上のレベル、及びIJ211以上のレベルの学生は、レベルやニーズに合わせて文法・談話、読解、聴解、会話、作文のクラスを技能別に登録することが可能である。学生は1科目から最大5科目まで履修登録することができる。また、技能習熟度に合わせて配置されたレベルよりも下のレベルのクラスを登録することも可能である。ただし、2レベルで同じ名称の科目を登録することは認めていない。またSJコースとIJコースの科目を両方取することはできない。SJコースに登録した学生はSJコースの科目のみ、IJコースに登録した学生はIJコースの科目のみ履修することができる。コース修了時、SJにおいては1科目1単位を、IJコースにおいては1科目2単位を認定している。

「漢字コース」は「漢字1000」「漢字2000」を開講しそれぞれ1単位を認定している。

以上の「標準日本語コース」、「集中日本語コース (IJコース)」、「漢字コース」の詳細に関しては全学向けプログラムの報告を参照いただきたい。

上記に加え、日本語能力試験N2、または旧日本語能力試験2旧合格者に対しては、春学期、秋学期それぞれ4科目開講している入門講義の受講も認め、1科目につき2単位を認定している。

また、グローバル30プログラムの学生を対象に開講されているビジネス日本語に加えてアカデミック日本語4科目も短期留学生が受講した場合、1科目1.5単位を認定している。

2. 2014年度からの変更

2013年度春学期のオリエンテーション、プレースメントテスト、クラス分け等の引き継ぎを前任者から行い、2013年秋学期より石崎が短期留学生日本語プログラムの担当となった。

3. 成績評価

2013年度より出席率を成績認定の評価項目には原則として組み込まず、「修了認定基準」でのみ取り扱うことになっている。これに準じて成績認定基準の表記が一部変更となり、成績評価は100点満点中60点以上であるが、出席率が80%以下の者に対してはF*と記すことになった。

表1 成績認定基準

成績	成績評価 (100点満点)
A*	100-90
A	89-80
B	79-70
C	69-60
F	59以下
F*	60点以上であるが、出席率が80%以下

4. 登録・成績状況

表2は春学期と秋学期の標準日本語コース、表3は集中日本語コースの登録者数を示したものである。登

録者数は春学期には短期留学生の88%に相当する110名中97名(異なり数)が、秋学期においては90%に相当する96名中86名(異なり数)が日本語を受講している。2013年度には、春学期には88%、秋学期においては84%の受講率であったので、2014年度はその割合は若干回復している。

一方、受講者の延べ人数でみると、標準日本語コースの受講生が春学期に203名、秋学期に211名となっている。2013年度の春学期268名、秋学期175名と比較すると春学期の人数は大幅に減っているが秋学期は大幅に増加している。一方、集中日本語コースの受講生は春学期に125名、秋学期に87名となっている。この数は2013年度の春学期84名、秋学期86名と比較すると春学期が大幅に増加している。春学期の標準日本語コースの登録者数が少なく、集中日本語コースが多い理由はただ単に集中コースを選択する学習者が多かったからではないかと思われる。

5. 今後の課題

毎学期100人強の短期留学生の日本語の授業に関する相談又はアドバイス、成績管理を行うのは現時点でも大変である。しかしながら、大学の方針でこの短期留学生数を現在の2倍に増やすという目標が掲げられているので、学生の個々のニーズを把握し、的確にアドバイスが出来、又、間違いのない成績管理を行うための対策を検討していかなくてはならない。

表2 標準日本語コースの登録者数

	春学期	秋学期
SJ101	7	11
SJ102	7	1
SJ200会話1&2	5	1
SJ200読解	5	1
SJ200聴解	5	1
SJ200文法・談話	6	1
SJ201会話1&2	6	5
SJ201読解	5	5
SJ201聴解	6	5
SJ201文法・談話	6	6
SJ202会話1&2	4	5
SJ202読解	4	7
SJ202聴解	3	5
SJ202文法・談話	4	6
SJ300会話1	4	9
SJ300会話2	5	5
SJ300読解	6	7
SJ300聴解	4	8
SJ300文法・談話	6	9
SJ301会話	8	5
SJ301読解	6	5
SJ301聴解	7	9
SJ301作文I	11	9
SJ301作文II	6	6
漢字1000	12	14
漢字2000	11	14
ビジネス1		6
ビジネス2	8	
ビジネス3		20
ビジネス4	13	
アカデミック(聴解・発表)1		1
アカデミック(聴解・発表)2	7	
アカデミック(聴解・発表)3		8
アカデミック(聴解・発表)4	2	
アカデミック(読解・作文)1		2
アカデミック(読解・作文)2	7	
アカデミック(読解・作文)3		14
アカデミック(読解・作文)4	7	
	203	211

表3 集中日本語コースの登録者数

	春学期	秋学期
IJ111	10	14
IJ112	4	8
IJ211会話1&2	12	5
IJ211読解	11	5
IJ211聴解	11	5
IJ211文法・談話	12	5
IJ212会話1	13	9
IJ212会話2	12	9
IJ212読解	14	9
IJ212聴解	12	9
IJ212文法・談話	14	9
	125	87

第15期 日韓理工系学部予備教育コース

村上京子

第15期日韓理工系学部予備教育コースは、平成26年10月7日から27年3月2日までの6か月（実質18週）間、6名の学生を対象に開講された。このコースは、工学部入学後の勉学や生活に支障のないよう、日本語運用および専門基礎能力を養成することを目的に行われる。日本語に関しては、日常生活に必要な会話練習のほか、科学読み物を読む、レポートを書く、講義形式のまとまりのある話を聴く等の練習を行う。また、教養科目「留学生と日本—異文化をとおしての日本理解—」や「日本事情」の授業を通じて日本文化に対する理解を深めることも目標とする。専門基礎教育に関しては、工学部スタッフを中心に物理・化学・数学に関して授業が行われた。

日程

10月1日(水) 渡日
 10月初旬 諸手続き
 10月7日(火) 開講式・日本語オリエンテーション、日本語診断テスト
 10月8日(水) 授業開始
 10月29日(水) バス旅行
 12月24日(水)～1月9日(金) 冬休み期間
 2月3日(火) 工学部入試
 2月25日(水) レポート発表会
 2月26日(木) 修了試験
 3月2日(月) 閉講式

科目別時間および担当者・内容

科目	コマ数	時間	担当	内容
日本語	15	420	留学生センター教員・非常勤講師5名	会話練習・聴解・文法・読解・作文・発音
専門科目	3	108	工学部教員・非常勤講師2名	物理・化学・数学
日本事情	1	36	留学生センター教員・非常勤講師1名	ビデオ・新聞等を使った日本事情
教養科目	1	30	留学生センター教員	日本人学生との合同クラス

時間割

	1限 8:45-10:15	2限 10:30-12:00	3限 13:00-14:30	4限 14:45-16:15
月	作文	教養科目 (留学生と日本)	読解	日本事情
担当	村上	浮葉他	ニロ	ソル
火	会話	聴解	化学	応用会話
担当	近藤	近藤	ソン	西坂
水	会話	発音 OL科学技術語彙	聴解	OL聴解
担当	ニロ	鹿島	千葉	
木	文法	聴解	OL読解・作文	OL漢字
担当	李	千葉		
金	会話	漢字・語彙	数学	物理
担当	梶原	梶原	富田	富田

OL：オンライン・コースの略

基本テキスト

会話：「現代日本語コース中級Ⅰ，Ⅱ」
 名古屋大学出版会 CD版
 聴解：「現代日本語コース中級 Web聴解Ⅰ，Ⅱ」
 CD、Web版
 読解：「大学・大学院 留学生の日本語 読解編」
 アルク
 作文：「留学生のための理論的な文章の書き方」
 スリーエーネットワーク
 漢字：「KANJI2200 日本語学習のためのよく使う漢字
 2200」三省堂
 「語彙マップで覚える漢字と語彙 中級1500」
 Jリサーチ出版

本コース学生受け入れに先立ち、工学部・留学生センター・国際課（事務）の3者によるワーキンググループを立ち上げ、協議を行った。時間割の調整、開講期間など取り決め、緊密に連絡を取りながらコースを進めていくことにした。

来日直後、恒例の診断テストを行った結果、例年とほぼ同様であったため、例年通りの目標設定でコース運営を行った。出席状況もよく、3課ごとの定期試験でもある程度の幅はあるものの全員規定レベルに達していた。修了試験でも前年度に比べ平均点が高く、問題のある学習者は見られなかった。

例年と同様、各自が選んだテーマで資料を収集し、レポートを作成した。レポート作成には全員説積極的に取り組み、2月25日に工学部教員も招いて、その発表会を実施した。レポートのテーマは、「オープンソースのメリット」「核融合発電」「飛行機事故の予防」「飛行機の歴史と発展過程」「カーボンナノチューブについて」「超伝導とは何か」であった。各自の発表後、工学部教員や日本語担当教員、先輩学生などから多くの質問・意見が出され、各自真剣に答えていた。この経験は、学習者にとって今後の勉学に取り組む上での自信にもつながり、貴重な体験となると考えられる。

日本語教育メディア・システムの開発

石崎 俊子 ・ 佐藤 弘毅

2014年度に以下の活動を行った。

1. 国際言語センターホームページの作成
2. A Course in Modern Japanese I&II Sound Download の開発
3. WebCMJ オランダ語版・ハンガリー語版の開発
4. オンライン日本語コースの運営

1. 国際言語センターホームページの作成 <http://jp.ilc.iee.nagoya-u.ac.jp/ja/>

The screenshot shows the homepage of the Nagoya University International Language Center. At the top, there is a navigation bar with links for 'サイトマップ', 'アクセス', 'English', and a search box. Below this is the header with the center's name in Japanese: '名古屋大学国際言語センター 日本語・日本文化教育部門'. A main banner image shows a diverse group of students sitting at desks in a classroom. Below the banner is a 'What's New' section with a link to '全学日本語プログラム'. The main content area is divided into three columns: '紹介' (Introduction) with links for 'ミッション', '教員紹介', '公衆情報', '研究・教育業績', '出版物', and 'アクセス・連絡先'; '日本語プログラム' (Japanese Programs) with links for '概要', '全学日本語プログラム', '特別日本語プログラム', and '日本語教育関連図書'; and '日本語オンライン教材' (Japanese Online Materials) with a list of resources including '現代日本語コース中級聴解 WebCMJ', 'オンライン日本語コース(Moodle)', 'とよた日本語eラーニング(TNe)', 'A Course in Modern Japanese I & II', '名古屋大学中級コース I', '名古屋大学中級コース II', '留学生のための専門講義の日本語', and 'その他のおすすめ教材'. The footer contains contact information for the center, the Nagoya University logo, and the copyright notice: 'Copyright © 2014 International Language Center, Nagoya University'.

改組に伴い、旧留学生センターのホームページを閉じ、2015年4月から運用の予定で国際言語センターのホームページを作成した。日本語プログラムと日本語オンライン教材は利用頻度が多いのでトップページから直接アクセスできるようにし、以前と同様、新着情報を表示できるような構成にした。現在、日本語版と英語版の2言語に対応している。

2. A Course in Modern Japanese I&II Sound Download の開発

A Course in Modern Japanese I & II Sound Download	
	Sound (mp3)
Volume I	Lesson1~Lesson3
	Lesson4~Lesson7
	Lesson8~Lesson10
Volume II	Lesson11~Lesson13
	Lesson14~Lesson16
	Lesson17~Lesson20

先学期まで販売していたA Course in Modern Japanese I&II の音声 CD の部数が少なくなったことと、USB メモリの普及により CD を再生するプレイヤーを持っている学生が少なくなったことから CD に入っている音源をすべて MP3 に変換してダウンロードできるようにした。CD の各音声には番号が振ってあり、インデックスリストと照らし合わせて聞きたい音声を探さなくてはいけなく手間がかかるので、一目見て何の音声かわかるようにわかりやすい名前を全ての音声に付けた。学生はこの MP3 の音声をダウンロードすることにより、コンピュータでもスマートフォンでも MP3 プレイヤーでも手軽に音声を聞くことが出来、今までより音声を聞いて学習する機会が増えると希望している。

3. WebCMJ オランダ語版・ハンガリー語版の開発

WebCMJ (<http://opal.ecis.nagoya-u.ac.jp/webcmj/>) は、名古屋大学日本語教育研究グループによる初級日本語教科書『A Course in Modern Japanese (改訂版) Vol. 1 & 2』(名古屋大学出版会、2002)に基づいて開発された、Web 上で日本語初級レベルの文法事項および日本語初級で扱われる漢字300字の読みが反復練習できるコンピュータ教材である。1998年に初版が開発され、2002年の教科書の改訂に併せて問題・形式・デザイン等が全面見直され、現在に至っている。

WebCMJ を使用するための説明の文章や問題指示文は、日本語学習者の世界分布や英語を苦手とする学習者の利便性を考慮して、文法版、漢字版ともに英語版、韓国語、中国語(簡体字)、中国語(繁体字)、タイ語、スペイン語、インドネシア語、ポルトガル語、ベトナム語、ロシア語、タガログ語、フランス語、クメール語、ドイツ語、モンゴル語、ウズベク語(ラテン文字表記)、ウズベク語(キリル文字表記)、日本語(説明のみ)の18言語による WebCMJ 多言語版の開発が2004年度から2012年度にかけて行なわれた。

今年度は、文法版、漢字版ともにオランダ語及びハンガリー語の2言語を新たに追加した。それぞれを母語とする留学生に、WebCMJ を使用するための説明の文章や問題指示文の翻訳を依頼し、訳された文章を Web 上に掲載した。これで WebCMJ 文法版と漢字版は20言語に翻訳されたことになる。

【WebCMJ 文法】

・オランダ語版

<http://opal.ecis.nagoya-u.ac.jp/webcmjg/index.nl.html>

・ハンガリー語版

<http://opal.ecis.nagoya-u.ac.jp/webcmjg/index.hu.html>

【WebCMJ 漢字】

・オランダ語版

<http://opal.ecis.nagoya-u.ac.jp/webcmjk/index.nl.html>

・ハンガリー語版

<http://opal.ecis.nagoya-u.ac.jp/webcmjk/index.hu.html>

4. オンライン日本語コースの運営

今年度のオンラインコースの履修状況は以下の通りであった。

【オンライン読解・作文コース】

前期	登録者数：26	後期	登録者数：39
	受講者数：8		受講者数：9
	修了者数：2		修了者数：5

2014年度オンライン読解・作文コースの修了者数(14課中10課以上60%以上の成績)は前期2名, 後期5名であった。

【オンライン漢字コース】

前期	登録者数：19	後期	登録者数：29
	受講者数：5		受講者数：8
	修了者数：0		修了者数：2

2014年度オンライン漢字コースの修了者数(10課中80%以上の成績)は前期0名, 後期2名であった

G30国際プログラム（学部）における日本語科目

初鹿野 阿 れ ・ 徳 弘 康 代

1. 国際プログラム（学部）における日本語科目

G30国際プログラム（学部）は、2011年秋に始まり、2015年3月現在4学年が在籍している。2014年秋学期には1年生が45名入学し、そのうち31名が必修日本語科目（「総合日本語・日本語セミナー（コミュニケーション）」）を履修した。2011年からの日本語履修者の年度別国別内訳（秋学期開始時の履修者数）は下の通りである。年度により増減はあるが、4年間の総数で見ると、インドネシア（21名）、マレーシア（18名）からの学生が多く、次いでインド、中国、ベトナム（各9名）となっている。今年度秋学期もこの5カ国の学生が全体の7割以上を占めている。

表1 G30初年次日本語履修者年度別国別内訳

国	2011年	2012年	2013年	2014年
アメリカ	2	1	2	2
イギリス				1
イタリア			1	
イラン	1			
インド	1	2	1	5
インドネシア		11	4	6
ウズベキスタン	3	2	1	
エジプト			1	
オーストラリア		1		
カナダ		1		
カメルーン		1		
韓国	1	2	5	
ザンビア				1
シンガポール	3	1		1
スリランカ				1
タイ		1		
台湾		1	3	1
中国	1	3	1	4
トルコ	1		2	
ニジェール		1		
日本	3		2	
ニュージーランド			1	
ハンガリー			1	
バングラデシュ		1		
フランス				1
ベトナム	1	2	2	4
マレーシア	6	4	4	4
メキシコ	1			
モンゴル	3		1	
計	27	35	32	31

日本語科目は、必修科目の他に2・3年生のために随意科目として「アカデミック日本語」と「ビジネス日本語」が開講されている。「アカデミック日本語」と「ビジネス日本語」はG30国際プログラムだけでなく名古屋大学に所属する留学生・研究生等に対しても開講されている。2015年春より、「アカデミック日本語」（文章理解・文章表現）5が開講される予定である。本年度、国際プログラム（学部）において開講された科目とその主な使用教材は以下の通りである。

秋学期（2014年10月～2015年3月）：

- ・総合日本語 1a・1b
- ・日本語セミナー（コミュニケーション）1a・1b
 - 『日本語初級1大地』
 - 『日本語初級2大地』
 - 『Write Now! Kanji for Beginners』
- ・アカデミック日本語（文章理解・文章表現）1
 - 『大学・大学院留学生の日本語1読解編』
 - 『大学・大学院留学生の日本語2作文編』
- ・アカデミック日本語（文章理解・文章表現）3
 - 『大学・大学院留学生の日本語3論文読解編』
 - 『大学・大学院留学生の日本語4論文作成編』
- ・アカデミック日本語（聴解・口頭表現）1
 - 『中級日本語で挑戦！スピーチ&ディスカッション』
- ・アカデミック日本語（聴解・口頭表現）3
 - 『アカデミック・スキルを身につける聴解・発表ワークブック』
- ・ビジネス日本語 1
 - 『新装版ビジネスのための日本語』前半
- ・ビジネス日本語 3
 - 『新装版商談のための日本語』前半

春学期（2014年4月～2014年9月）：

- ・総合日本語 2a・2b
- ・日本語セミナー（コミュニケーション）2a・2b
 - 『日本語初級2大地』

『みんなの日本語中級Ⅰ』

『Write Now! Kanji for Beginners』

- ・アカデミック日本語（文章理解・文章表現）2
秋学期と同じ教材の後半
- ・アカデミック日本語（文章理解・文章表現）4
秋学期と同じ教材の後半
- ・アカデミック日本語（聴解・口頭表現）2
『もっと中級日本語で挑戦！スピーチ&ディスカッション』
- ・アカデミック日本語（聴解・口頭表現）4
『アカデミック・スキルを身につける聴解・発表ワークブック』
- ・ビジネス日本語 2
『新装版ビジネスのための日本語』後半
- ・ビジネス日本語 4
『新装版商談のための日本語』後半

2. その他の活動

昨年度に続き、今年度も2015年2月21日（土）に豊田講堂で行われた「名古屋大学基金感謝の集い」にお

いて、名古屋大学基金より奨学金を受けている2名の学部生がスピーチを行った。3年生1名と2年生1名である。3年生は授業や研究で非常に忙しい合間を縫って準備をし、本番に臨んだ。2年生も学期末試験のあとの短い時間で原稿を書き、さらに何度も書き直して、練習を重ねた。当日は、堂々とした態度で、名古屋大学への入学を決めるに至った経緯や大学での生活、授業、研究、そして将来への希望について日本語で発表することができた。学生達の感謝の気持ちが十分に伝わるスピーチであった。参加者の方々も非常に熱心に聞いてくださり、その後の懇親会でも学生達と個人的に話しに来てくださった。名刺交換や歓談等、楽しく有意義な交流ができたようである。

今年度の感謝の集いでは、施設見学として赤崎記念研究館へ行き、天野浩工学研究科教授から説明を受ける機会も得た。ノーベル賞受賞者と、少しではあるが言葉を交わすことができ、2人にとって素晴らしい経験であったであろう。

G30国際プログラムの学生が日本語を学習することで、世界が広がっていくことを実感できるような活動を今後も増やしていきたい。



「平成26年度名古屋大学基金感謝の集い」

資 料

歴代センター長

平成26年度 国際言語センターの専任教員

平成26年度 日本語コースの担当者

平成26年度 授業担当および学位審査論文

平成26年度 国際言語センター教員研究業績

平成26年度 国際言語センター研究会記録

平成26年度 国際言語センター全学委員会委員

国際言語センター沿革

歴代センター長

留学生センター

初代	馬越 徹	1993年4月～1995年3月
第二代	石田 眞	1995年4月～1999年3月
第三代	塚越 規弘	1999年4月～2001年3月
第四代	末松 良一	2001年4月～2005年3月
第五代	江崎 光男	2005年4月～2007年3月
第六代	石田 幸男	2007年4月～2011年3月
第七代	町田 健	2011年4月～2013年9月

国際言語センター

初代	福田 眞人	2013年10月～
----	-------	-----------

平成26年度 国際言語センターの専任教員

センター長 福田 眞人 (2013年10月～)

日本語・日本文化教育部門

教授	村上 京子
教授	鹿島 央
教授	初山 洋介
教授	浮葉 正親
教授	衣川 隆生
准教授	石崎 俊子
准教授	李 澤熊
准教授	佐藤 弘毅
特任准教授	初鹿野阿れ
特任准教授	徳弘 康代

英語教育部門

特任教授	FISCHER Berthold (兼任)
特任教授	BUTKO Peter (兼任)
特任准教授	WOJDYLO John Andrew (兼任)
特任准教授	VASSILEVA Maria Nikolaeva (兼任)

平成26年度 日本語コースの担当者

1. 日本語研修 コース

〈4月期：第70期〉

鹿島 央	坪田 雅子
佐藤 弘毅	安井 澄江
魚住 友子	松木 玲子
大羽かおり	久野伊津子
高橋 伸子	

〈10月期：第71期〉

鹿島 央	坪田 雅子
佐藤 弘毅	安井 澄江
魚住 友子	松木 玲子
大羽かおり	久野伊津子
高橋 伸子	

2. 日本語・日本文化研修コース

〈2013年10月～2014年9月：第33期〉

初山 洋介	向井 淑子
佐々木八寿子	國澤 里美
中川 康子	松岡みゆき
西田 瑞生	加藤 惠梨

3. 教養科目「留学生と日本 —異文化を通しての日本理解」

浮葉 正親	田所真生子
高木ひとみ	渡部 留美

4. 全学向け日本語コース

〈前期〉

李 澤熊	嶽 逸子
浮葉 正親	椿由 起子
石崎 俊子	坪田 雅子
村上 京子	西田 瑞生
鹿島 央	安井 澄江
初山 洋介	魚住 友子
佐藤 弘毅	大羽かおり
衣川 隆生	服部 淳
初鹿野阿れ	松木 玲子
徳弘 康代	加藤 惠梨
石川 公子	中川 康子
久野伊津子	向井 淑子
佐々木八寿子	加藤 淳
宗林 由佳	安井 朱美
高橋 伸子	國澤 里美
高安 葉子	金 敬黙

〈後期〉

李 澤熊	嶽 逸子
浮葉 正親	椿由 起子
石崎 俊子	坪田 雅子
村上 京子	西田 瑞生
鹿島 央	安井 澄江
初山 洋介	魚住 友子
佐藤 弘毅	大羽かおり
衣川 隆生	服部 淳
初鹿野阿れ	松木 玲子
徳弘 康代	加藤 惠梨
石川 公子	中川 康子
久野伊津子	向井 淑子
佐々木八寿子	加藤 淳
宗林 由佳	安井 朱美
高橋 伸子	國澤 里美
高安 葉子	金 敬黙

5. 学部留学生を対象とする言語文化科目
〈日本語〉

〈前期〉

浮葉 正親	鷺見 幸美
村上 京子	西田 瑞生
魚住 友子	國澤 里美

〈後期〉

浮葉 正親	鷺見 幸美
村上 京子	西田 瑞生
魚住 友子	國澤 里美

6. 日韓理工系学部留学生日本語プログラム

〈2014年10月～2015年3月〉

村上 京子	ソル ヘソン
李 澤熊	近藤 行人
石崎 俊子	西坂 祥平
千葉 月香	梶原 彩子
二口和紀子	

7. G30国際プログラム（日本語科目）

初鹿野阿れ	加藤 淳
徳弘 康代	安井 朱美

平成26年度 授業担当および学位審査論文

I. 授業担当 (大学院・教養教育院・NUPACE)

1. 大学院

国際言語文化研究科

鹿島 央：日本語音声学 a (前期1コマ 2単位)

日本語音声学 b (後期1コマ 2単位)

榎山洋介：現代日本語学概論 a (前期1コマ 2単位)

現代日本語学概論 b (後期1コマ 2単位)

李 澤熊：日本語文法論 a (前期1コマ 2単位)

日本語文法論 b (後期1コマ 2単位)

村上京子：日本語教育評価論 a (前期1コマ 2単位)

日本語教育評価論 b (後期1コマ 2単位)

衣川隆生：日本語教育方法論概説 a
(前期1コマ 2単位)

日本語教育方法論概説 b
(後期1コマ 2単位)

石崎俊子：コンピューター支援日本語教育方法論 a
(前期1コマ 2単位)

コンピューター支援日本語教育方法論 b
(後期1コマ 2単位)

佐藤弘毅：日本語教育工学 a (前期1コマ 2単位)

日本語教育工学 b (前期1コマ 2単位)

浮葉正親：日韓比較文化論 a (前期1コマ 2単位)

日韓比較文化論 b (後期1コマ 2単位)

文学研究科

榎山洋介：理論言語学 a (前期1コマ 2単位)

理論言語学 b (後期1コマ 2単位)

2. 教養教育院

浮葉正親：基礎セミナー A「韓流ドラマから『パッチギ』まで一日韓比較文化論のすすめ」

(前期1コマ 2単位)

浮葉正親(代表)・田中京子・高木ひとみ・田所真生子：
全学教養科目「留学生と日本-異文化を通しての日本理解」 (後期1コマ 2単位)

佐藤弘毅：全学教養科目「情報リテラシー (文系)」
(前期1コマ 2単位)

村上京子：全学基礎科目「言語文化I日本語1」
(前期2コマ 3単位)

村上京子：全学基礎科目「言語文化I日本語2」
(後期2コマ 3単位)

浮葉正親：全学基礎科目「言語文化II日本語1」
(前期1コマ 2単位)

浮葉正親：全学基礎科目「言語文化II日本語2」
(後期1コマ 2単位)

徳弘康代：Integrated Japanese 1
(後期3コマ 3単位)

徳弘康代：Integrated Japanese 2
(前期3コマ 3単位)

徳弘康代：Japanese Language Seminar
(Communication) 1 (後期2コマ 3単位)

徳弘康代：Japanese Language Seminar
(Communication) 2 (前期2コマ 3単位)

徳弘康代：Academic Japanese (Reading & Writing) 1
(後期1コマ 1.5単位)

徳弘康代：Academic Japanese (Reading & Writing) 2
(前期1コマ 1.5単位)

徳弘康代：Academic Japanese (Reading & Writing) 5
(前期1コマ 1.5単位, 後期1コマ1.5単位)

初鹿野阿れ：Integrated Japanese 1
(後期3コマ 3単位)

初鹿野阿れ：Integrated Japanese 2
(前期3コマ 3単位)

初鹿野阿れ：Japanese Language Seminar
(Communication) 1
(後期2コマ 3単位)

初鹿野阿れ：Japanese Language Seminar
(Communication) 2
(前期2コマ 3単位)

初鹿野阿れ：Academic Japanese (Listening &
Presentation) 1 (後期1コマ 1.5単位)

初鹿野阿れ：Academic Japanese (Listening & Presentation) 2 (前期1コマ 1.5単位)

李 澤熊：入門講義「日本語学1」
(後期1コマ 2単位)

李 澤熊：入門講義「日本語学2」
(前期1コマ 2単位)

3. 名古屋大学短期交換留学プログラム (NUPACE)

初山洋介：入門講義「言語学1」
(後期1コマ 2単位)

徳弘康代：入門講義「日本文学1」
(後期1コマ 2単位)

初山洋介：入門講義「言語学2」
(前期1コマ 2単位)

徳弘康代：入門講義「日本文学2」
(前期1コマ 2単位)

浮葉正親：入門講義「日本文化論1」
(後期1コマ 2単位)

金 敬黙 (非常勤講師)：入門講義「国際関係論1」
(後期1コマ 2単位)

浮葉正親：入門講義「日本文化論2」
(前期1コマ 2単位)

金 敬黙 (非常勤講師)：入門講義「国際関係論2」
(前期1コマ 2単位)

II. 学位 (博士) 論文審査

○村上京子 (主査)

論文提出者：片桐準二 (国際言語文化研究科)
提出論文：文脈アプローチによる言語学習ビリー
フの形成・変容過程の質的研究

○初鹿野阿れ (副査)

論文提出者：片桐準二 (国際言語文化研究科)
提出論文：文脈アプローチによる言語学習ビリー
フの形成・変容過程の質的研究

○衣川隆生 (副査)

論文提出者：片桐準二 (国際言語文化研究科)
提出論文：文脈アプローチによる言語学習ビリー
フの形成・変容過程の質的研究

○初山洋介 (副査)

論文提出者：陳帥 (国際言語文化研究科)
提出論文：現代日本語におけるオノマトベの意味
拡張-「CVQCVri」型を対象にして-

平成26年度 国際言語センター教員研究業績

(1) 李 澤熊

論文

- 1) 李 澤熊 (2014) 「補助動詞「～てくる」の意味分析－日本語教育の観点から－」, 『韓日語文論集』第18輯, pp.95-112, 韓日語日文学会 (韓国)
- 2) 李 澤熊 (2014) 「韓国人日本語学習者のための日韓対照言語研究－多義語分析を中心に」, 『日本認知言語学会論文集』第14巻, pp.667-672, 日本認知言語学会
- 3) 李 澤熊 (2014) 「「余裕」と「ゆとり」の意味分析－ベースとプロファイルの観点から－」『言語文化論集』第36巻1号, pp.3-14, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 4) 李澤熊 (2015) 「動詞「来る」の意味分析」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第22号, pp.119-142, 名古屋大学国際言語センター

口頭発表

- 1) 李 澤熊 (2014) 「動詞「来る」の多義構造－日本語教育の観点から－」, (日本語教育学会研究集会第3回), 2014年7月, 於愛知大学

その他

- 1) 李 澤熊 (2014) 「作る」『基本動詞ハンドブック』, 述語構造の意味範疇の普遍性と多様性 プロジェクト, 国立国語研究所 (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>)
- 2) 李 澤熊 (2015) 「引く」『基本動詞ハンドブック』, 述語構造の意味範疇の普遍性と多様性 プロジェクト, 国立国語研究所 (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>)
- 3) 李 澤熊 (2015) 「押す」『基本動詞ハンドブック』, 述語構造の意味範疇の普遍性と多様性 プロジェクト, 国立国語研究所 (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>)

(2) 石崎俊子

教材 (オンライン教材)

- 1) Quizlet Vocabulary for Intermediate Listening

<https://quizlet.com/NAGOYAJT/folders/ij212>

- 2) A Course in Modern Japanese I & II Listening

<http://opal.ecis.nagoya-u.ac.jp/~jems/CMJsound.html>

- 3) Communicating in Japanese Mac 版

<http://opal.ecis.nagoya-u.ac.jp/~jems/HAJIMESample.htm>

(3) 浮葉正親

論文

- 1) 浮葉正親 (2015) 「異人論から見た韓国の巫俗——ソウルの村祭りを中心に」山泰幸・小松和彦編『異人論とは何か ストレンジャーの時代を生きる』ミネルヴァ書房, 221-243頁

発表

- 1) 浮葉正親 (2014) 「神託 (コンス) とご祝儀 (別費) ——ソウルの村祭りにおけるコミュニケーションの諸相」説話・伝承学会シンポジウム「アジアのなかの「花祭」——奥三河の民俗芸能伝承を捉え直す」, 中京大学, 2014年4月27日
- 2) 浮葉正親 (2014) 「ソウルの村祭り——府君堂クックを中心に」日本民俗学会第66回年会, 岩手県立大学, 2014年10月12日

書評

- 1) 浮葉正親 (2014) 「黄英治著『あの壁まで』影書房・2013年」『神奈川大学評論』第78号, 159頁

(4) 鹿島 央

研究論文

- 1) 鹿島 央・橋本慎吾 (2015) 「持続時間と呼気流量による発話文中の語の分析」『日本語・日本文化論集』第22号, pp.159-176, 名古屋大学国際言語センター

講演

- 1) 「リズムユニットを単位とする音声教育の可能性について」2014年9月20日, 於: 東京音声研究会 (早稲田大学)

(5) 衣川隆生

論文

- 1) 末松大貴・衣川隆生 (2015) 「評価の項目及びその基準を考える協働活動に教師の声が与える影響—中上級日本語学習者を対象とした口頭発表技能クラスにおいて—」『日本語教育方法研究会会誌』, Vol.22, No.1, pp.40-41.
- 2) 片上摩紀・衣川隆生 (2015) 「他者の課題遂行を評価する活動が自身のメタ認知コントロールに与える影響—中上級日本語学習者を対象とした口頭発表技能育成クラスにおいて—」『日本語教育方法研究会会誌』, Vol.22, No.1, pp.104-105.

(6) 佐藤弘毅

論文

- 1) 北澤武・佐藤弘毅・赤堀侃司 (2014) 「モバイル端末を活用した小テストの出題形式と出題方法が動機づけや正答率に与える影響—テスト接近・回避傾向に着目して—」『日本教育工学会論文誌』 Vol.38, No.3, pp.193-209.

口頭発表

- 1) 佐藤弘毅 (2015) 「電子黒板を用いた実験的授業におけるノートテイキング内容に関する分析」『教育システム情報学会研究報告』 Vol.29, No.6, pp.103-110.

(7) 徳弘康代

著書・論文

- 1) 徳弘康代 (著), 車小平 (編・訳) (2014) 『日語常用漢字2100』 四川大学出版
- 2) 徳弘康代 (編・著) (2014) 『日本語学習のためのよく使う順漢字2200』 三省堂
- 3) 徳弘康代 (監修・著) (2015) 『語彙マップで覚える漢字と語彙 初級1400』 Jリサーチ出版

発表

- 1) 徳弘康代 (2014) 「日本詩歌の解釈鑑賞と創作 実践報告」2014年度日本語教育学会第4回研究集会北海道地区, 2014年7月5日, 北海道大学 (口頭発表)
- 2) 徳弘康代 (2015) 「語彙マップを用いた初級漢字語

彙教材の開発」第54回 JSL 漢字学習研究会 (日本語教育学会テーマ研究会), 2015年2月21日, 早稲田大学 (口頭発表)

講演

- 1) 徳弘康代 (2014) 「学習者の立場に立った漢字指導」長沼スクール夏季セミナー, 2014年8月11日, 東京日本語学校

(8) 初鹿野阿れ

発表

- 1) 初鹿野阿れ・岩田夏穂 (2014) 「話の展開のやり方をターゲットとした「からかい」の分析」社会言語科学会第34回研究大会, 2014年9月13日, 立命館アジア太平洋大学
- 2) 横森大輔・安井永子・初鹿野阿れ・勝田順子・市村葉子・古田朋子 (2014) 「「コネチカットね」-助詞「ね」が付与された他者発話の部分的繰り返しにみられる相互行為秩序-」社会言語科学会第34回研究大会, 2014年9月14日, 立命館アジア太平洋大学

(9) 初山洋介

著書

- 1) 初山洋介 (2014) 『日本語研究のための 認知言語学』, 研究社, 206頁

論文

- 1) 初山洋介 (2014) 「百科事典の意味における一般性が不完全な意味の重要性」, 『日本認知言語学会論文集』 14, pp.661-666, 日本認知言語学会
- 2) 初山洋介 (2015) 「『文字通り』の機能」, 『名古屋大学 日本語・日本文化論集』 22, pp.143-157, 名古屋大学国際言語センター

書評

- 1) 初山洋介 (2015) 「『大人の日本語』養成講座」(野内良三著), 『英語教育』 63-11, p.92, 大修館書店

研究発表

- 1) 初山洋介 (2014) 「多義語分析の課題と方法」(NINJAL Typology Festa 3), 2014年12月13日, 於国立国語研究所
- 2) 初山洋介 (2015) 「多義語の多様性と位置づけ」(現

代日本語学研究会・第150回), 2015年3月14日, 於
名古屋大学

その他

- 1) 舩山洋介 (2014) 「意味論」, (日本言語学会・夏期講座2014), 2014年8月18日~23日, 於名古屋大学
[「意味論」, 『日本言語学会・夏期講座2014 Seminar Handbook』, pp.13-42]
- 2) 舩山洋介 (2015) 『基本動詞ハンドブック』WEB版 (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>), 国立国語研究所・共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性(基本動詞ハンドブック作成チーム) [執筆担当語「上がる」「下がる」「上げる」「下げる」/校閲担当語「行く」「て-いく」「来る」「て-くる」「登る・昇る・上る」「下りる・降りる」「さわる」「ぶつかる」「ある」「作る」]

(10) 村上京子

著書・論文

- 1) 村上京子 (2015) 「『生活者としての外国人』のための日本語能力判定」李在鎬編『日本語教育のための言語テストガイドブック』くろしお出版 pp.154-174
- 2) 村上京子 (2015) 「外国人が書いた日本語電子メール文の特徴と評価」『ヨーロッパ日本語教育』vol.19
- 3) 村上京子 (共著) 『とよた日本語判定 レベル判定』豊田市

発表・講演

- 1) 村上京子 (2014) 「学習支援につながる評価のしくみ」基調講演・ワークショップ デンマーク・東海大学ヨーロッパ学術センター
- 2) 村上京子 (2014) 「外国人が書いた日本語電子メール文の特徴と評価」第18回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム スロベニア・リュブリアナ大学
- 3) 村上京子 (2014) 「日本語教育における e-learning と e-testing の開発と運用」オランダ・ライデン大学

平成26年度 国際言語センター研究会記録

教員による研究会

(1) 現代日本語学研究会

(関係教員：初山洋介／李澤熊)

「現代日本語学研究会」は、初山洋介を世話人として、1994年3月に始まったものである。また、2003年4月より、李澤熊が事務局を担当し、研究会の運営に尽力している。研究会は2015年3月現在で150回開催されている。参加者は毎回15～30人程度である。

本研究会は現代日本語を研究対象とし（日本語と他言語との対照研究を含む）、「意味論」「文法論」「語用論」等の分野で研究を行っている研究者（教員、大学院生等）の集まりである。ただし、参加者の研究の枠組みは多岐にわたり、理論志向の研究者も記述志向の研究者もいる。また、認知言語学を専攻する者も生成文法の研究者もいる。参加資格は、原則として、（近い将来）研究発表が可能な者とし、研究の水準は修士論文以上を目安としているが、学部レベルの参加者もいる。

2014年度に開催された研究会は以下の通りである。

第143回：2014年4月19日

発表者：梶川克哉（名古屋SKY日本語学校）

発表題目：逆接「～ながら」の内包的志向性

第144回：2014年6月28日

発表者：ヴァルオール・ゴンジャ（国際交流基金フェロシップ・博士論文執筆者）

発表題目：日本語とトルコ語における身体語彙慣用句の比較研究—「口」「鼻」「耳」「目」を中心に—

第145回：2014年8月1日

発表者：ミン ソラ（名古屋大学大学院【院】）

発表題目：カテゴリーの周辺例を明示する表現に関する考察

第146回：2014年10月25日

発表者：木下りか（武庫川女子大学）

発表題目：「だろう」と「広義原因」の認識表示—名詞述語における叙述のタイプとの関連性—

第147回：2014年11月29日

発表者：木村あずさ（名古屋大学大学院【院】）

発表題目：「未遂を表す後項動詞の意味分析—～そこなう、～そびれる、～のがすを中心に—」

第148回：2014年12月20日

発表者：梶原彩子（名古屋大学大学院【院】）

発表題目：「程度副詞の名詞修飾—カテゴリー帰属を表す表現の考察から—

第149回：2015年2月28日

発表者：馬場典子（名古屋大学大学院国際言語文化研究科学術研究員）

発表題目：「嫌悪」を表す動詞の意味分析—「嫌う」と「疎む」を中心に

第150回：2015年3月14日

発表者：初山洋介（名古屋大学）

発表題目：多義語の多様性と位置づけ

(2) 名古屋音声研究会

(関係教員：鹿島央)

本研究会は、音声学を専攻する学生あるいは音声に興味を持っている学生がそれぞれの抱える問題を共有する場として2004年5月にスタートしました。前期は4月から7月まで、後期は10月から1月まで、毎週金曜日の夕方5時から開催しています。以下は、2014(平成26)年度の発表者の名前とタイトルです。

2014年度(前期)

4月18日(金)

日本語学習のための歌教材の開発—「～する」の練習曲—(吉田千寿子)

4月25日(金)

韓国人日本語学習者の日本語破裂音・破擦音・摩擦音における音声的な長さコントロールについて(チョスヒョン)

- 5月2日(金)
日本語音声の第二言語習得研究の展望と発展的課題
(福岡昌子)
- 5月9日(金)
マラティー語母語話者の日本語破裂子音の生成
(寺田友子)
- 5月16日(金)
無声化と促音の誤りに関する分析／促音の誤りの頻度と既知語テストの成績との関係(久野百代)
- 5月23日(金)
インドネシア人日本語学習者における日本語の摩擦子音の生成と知覚の特徴(ヘニ・ヘルナワティ)
- 5月30日(金)
中国人学習者の撥音語におけるアクセントの誤謬の基礎的研究－アクセント・パターン判定及び音響分析を中心として－(許リン)
- 6月6日(金)
日本語学習者における日本語母音無声化の言語的要因について(スディア)
- 6月20日(金)
学習経験が日本語アクセント知覚に与える影響－研究計画－(梁辰)
- 6月27日(金)
ナ行子音とラ行子音を混同する日本語学習者のための発音指導法の効果－桂林地方出身の中国人日本語学習者を対象に－(蒋媛)
- 7月4日(金)
中国人日本語学習者のアクセント生成における母方言の影響(柏琳)
- 7月11日(金)
ベンガル語母語話者の日本語生成における音声的特徴(近藤三紀子)
- 7月18日(金)
日本人英語学習者のリスニングにおける韻律の役割について(本山潤)
- 2014年度(後期)
- 10月17日(金)
外国語・外来語による促音の生成と知覚－韓国語の濃音化・激音化現象との比較・対照－(イジェヨン)
- 10月24日(金)
日本語母音無声化の判定方法における信頼性について－音響分析と聴取判定に基づいて－(スディア)
- 10月31日(金)
視聴覚教材を用いた日本語音声指導の実践(吉田千寿子)
- 11月7日(金)
広東語を母語とする日本語学習者における特殊拍の脱落・挿入・混同(久野百代)
- 11月14日(金)
ベンガル語母語話者の日本語生成における音声的特徴(近藤三紀子)
- 11月21日(金)
中国人日本語アクセントにおける母方言の影響について－北京語話者と上海語話者を対象に－(柏琳)
- 11月28日(金)
マラティー語を母語とするインド人日本語学習者の日本語破裂音における音声的特徴(寺田友子)
- 12月5日(金)
韓国人日本語学習者の日本語歯茎破裂音における音声的な長さコントロールについて－要因分析を中心に－(チョスヒョン)
- 12月12日(金)
インドネシア人日本語学習者における日本語の摩擦子音の知覚の特徴(ヘニ・ヘルナワティ)
- 12月20日(金)
学習経験が日本語 LH・HL 対立の知覚に与える影響－中国語話者を対象とした範疇知覚同定実験の結果から－(梁辰)
- 2015年
- 1月16日(金)
湘方言を母語とする中国人における中国語 /n/ と /l/, 日本語の /n/ と /r/ のそれぞれの混同について(蒋媛)
- 1月23日(金)
日本人英語学習者の英語発話におけるリズムについて(本山潤)

平成26年度 国際言語センター全学委員会委員

平成26年度 国際言語センター全学委員会委員

(平成26年4月～)

委員会名	委員	任期	期間
国際教育交流本部会議	センター長		3号委員
国際交流委員会	衣川 隆生	2年	
国際教育運営委員会	村上 京子 初鹿野 阿れ 徳弘 康代		7号委員 (オブザーバ) (オブザーバ)
交換留学実施委員会	衣川 隆生		5号委員
研究助成委員会	石崎 俊子	2年	平成26年4月1日～平成28年3月31日
全学教育企画委員会	浮葉 正親	2年	平成26年4月1日～平成28年3月31日
オープンコースウェア (OCW) 運営協議会運営委員	石崎 俊子	2年	平成26年4月1日～平成28年3月31日
附属図書館商議委員会 オブザーバー	浮葉 正親	2年	平成26年4月1日～平成28年3月31日
情報セキュリティ組織連絡協議会	佐藤 弘毅		
全学同窓会幹事会	李 澤熊		
こすもす保育園運営協議会	石崎 俊子	2年	平成26年4月1日～平成28年3月31日
災害対策室会議	衣川 隆生		平成25年4月1日～平成26年3月31日
全学計画・評価担当者会議	鹿島 央		(留学生センター)
教養教育院統括部 言語文化科目部会	浮葉 正親	1年	平成25年4月1日～平成26年3月31日
名古屋大学スペース・コラボレーション・システム事業委員会 全学教育棟子局運営委員会	佐藤 弘毅	1年	平成25年4月1日～平成26年3月31日

平成26年度 国際言語センター内部委員会委員

委員会名	下位部会・WG	メンバー
総務委員会	特昇 WG	<u>衣川隆生</u>
財務・施設委員会	経理・整備 WG	<u>李 澤熊</u> ・ <u>佐藤弘毅</u>
	PC室管理運営 WG	<u>佐藤弘毅</u> ・ <u>衣川隆生</u> ・ <u>石崎俊子</u> ・ <u>鹿島 央</u> ・ <u>李 澤熊</u>
	安全・防災部会	<u>衣川隆生</u> ・ <u>鹿島 央</u> ・ <u>石崎俊子</u>
広報委員会	広報・紀要部会	<u>浮葉正親</u> ・ <u>李 澤熊</u> ・ <u>佐藤弘毅</u>
	ホームページ部会	<u>石崎俊子</u>
	日本語・日本文化論集編集部会	<u>初山洋介</u> ・ <u>浮葉正親</u>

国際言語センター沿革

	日本語・日本文化教育部門	日本語教育メディア・システム開発部門
1977	語学センターが非常勤講師による外国人留学生のための日本語教育を開始	
1978	専任講師着任, 「全学向け日本語講座」授業開始	
1979	語学センターと教養外国語系列が総合され, 総合言語センター発足 総合言語センターの1部門として「日本語学科」設置 「日本語研修コース」開講	
1981	「日本語・日本文化研修コース」開講	
1984	教養部在籍留学生対象一般教育外国語科目「日本語」開講	
1991	総合言語センターが言語文化部に改組。それに伴い一般教育外国語科目「日本語」は言語文化科目「日本語」として開講される	
1993. 4	学内共同教育研究施設として, 「留学生センター」設置 (「日本語・日本文化教育部門」・「指導相談部門」の2部門体制) 留学生センターとして, これまで通り「全学向け日本語講座」「日本語研修コース」「日本語・日本文化研修コース」言語文化科目「日本語」を開講	
1994. 4	留学生センター研修生規定が定められ, (1994.2), 研修生の受け入れ開始	
1996. 4	短期留学生対象日本語授業開始	
1998. 4	インターネットによる WebCMJ のオンライン開始	
1999. 4		「日本語教育メディア・システム開発部門」発足 (留学生センター4部門体制となる)
8		担当助教授着任 (ハリソン)
2000. 4		二人目の担当助教授着任 (大野)
2001. 3	留学生センター新棟完成	
2003. 3	教授1名退任 (藤原)	
4	講師1名採用 (李)	
2004. 2		助教授1名転任 (ハリソン)
3	助教授1名退任 (神田)	
4		WebCMJ 多言語版開発 オンライン読解・作文コース開始
11		助教授1名採用 (石崎)
2005. 3		助教授1名転任 (大野)

	日本語・日本文化教育部門	日本語教育メディア・システム開発部門
4	日本語プログラムの再編成 1) 全学日本語プログラム(集中コース, 標準コース, 漢字コース, 入門講義, オンライン日本語コース) 2) 特別日本語プログラム(初級日本語特別プログラム, 上級日本語特別プログラム, 学部留学生向け日本語授業, 日韓理工系学部留学生プログラム)	教授1名日本語・日本文化教育部門から配置換え(村上) オンライン漢字コース開始
5	留学生センターホームページ改訂	
6	講師1名採用(佐藤)	
2006. 3	教授1名転任(尾崎)	
4	助教授1名採用(衣川)	現代日本語コース中級聴解 CD-ROM 開発
5	教授1名昇任(昀山)	
10		現代日本語コース中級聴解 Web 開発
2007. 2		現代日本語コース中級聴解 Web 課金開始
6	准教授1名昇任(李)	
2008. 3		JEMS オンライン日本語教育ポータルサイト開発
2009. 11	特任准教授1名着任(初鹿野:国際交流協推進本部)	
2010. 2	特任准教授1名着任(徳弘:国際交流協推進本部)	
2011. 3		TNeとよた日本語eラーニング会話編(市役所, 病院, 学校)完成 TNeとよた日本語eラーニング文字編(ひらがな, カタカナ, 履歴書)完成
2012. 3		WebCMJ 多言語版完成(17言語) 「名古屋大学日本語コース中級I & II」オンライン及びデジタル版の開発 TNeとよた日本語eラーニング会話編5カ国版完成 TNeとよた日本語eラーニング文字編5カ国版完成
2013. 4	教授2名昇任(浮葉, 衣川)	
10	国際交流協力推進本部改編に伴い, 留学生センター日本語・日本文化教育部門及び日本語教育メディア・システム開発部門は, 「国際言語センター」に改組(「日本語・日本文化教育部門」・「英語教育部門」の2部門体制)。	
2014. 4	准教授1名昇任(佐藤)	
2015. 2	国際言語センターホームページ改訂	
3	教授1名定年退職(村上)	

編集後記

現在本センターでは、活動報告にもあるように主に7つの日本語プログラムを統括、実施している。留学生30万人計画が進む中、今後日本語教育へのニーズはさらに多様化するものと予想され、新たな日本語プログラムの開発・強化が急がれる。

ここ数年、本学では国際化戦略に伴い、留学生を対象とした様々なプロジェクト型の教育が積極的に行われており、日本語教育を担っている本センターの役割はさらに重要になることが予想される。

現在、本学で取り組んでいる主な留学生受け入れプログラムとしては「工学自動車プログラム（工学研究科）」「キャンパスアジア（法学研究科）」「キャンパスアセアン（国際開発研究科・経済学研究科・法学研究科）」「博士課程教育リーディングプログラム（全学）」などがあり、そのカリキュラムの一部として日本語プログラムが組み込まれるケースが多い。しかし、各々のプログラム（日本語教育関係教員）と本センターとの連携は必ずしも十分とは言えず、今後、大学全体として日本語教育の体制を整備し、強化していく必要があると考えられる。

(LT)

名古屋大学国際教育交流本部 国際言語センター年報 第2号

2015年8月31日 印刷・発行

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

編集者 名古屋大学国際教育交流本部
国際言語センター

電話 (052) 789-2198

FAX 789-5100

印刷所 株式会社 荒川印刷
名古屋市中区千代田2-16-38
電話 (052) 262-1006

Nagoya University International Education & Exchange
International Language Center
Annual Report Vol. 2